

令和6年度



交通安全

ファミリー作文
コンクール



警察庁

令和六年度交通安全ファミリー作文コンクール優秀作品集の発刊に当たって

皆様には、日頃から交通安全活動に御尽力をいただいておりますことに対し、厚く御礼申し上げます。

さて、昨年の交通事故による死者数は、二千六百六十三人で、前年と比較して十五人減少いたしました。

しかしながら、今なお多くの尊い命が交通事故で失われていることには変わりなく、次代を担う子どもが犠牲となる痛ましい交通事故や、飲酒運転をはじめとする悪質・危険な運転による重大な交通事故も依然として後を絶ちません。政府が目標とする世界一安全な道路交通を実現するためには、各界各層の一層の連携した取組が必要と考えております。

交通事故は、国民の誰もが当事者となるおそれのある身近な問題です。安全で快適な交通社会を実現するためには、国民の皆様一人一人が交通ルールを守り、自動車や自転車の運転者、歩行者がそれぞれ相手の立場に配慮し、思いやりの気持ちをもって交通マナーを実践していくなど、積極的に交通安全に関わっていくことが大切です。

「交通安全ファミリー作文コンクール」は、家庭、学校、地域等において交通安全について話し合ったこと、また、これらを通じて思ったことや感じたことなどについて、作文を通じて国民の皆様が共有することで、具体的な交通安全活動の実践につながる取組として四十六年の永きにわたり続いてまいりました。

今年度も小学一年生から中学三年生まで四千五百六十点の応募をいただきました。

本書は、その応募作品の中から、最優秀作（内閣総理大臣賞）をはじめとする優秀作品をまとめたものです。この作品集を通じて、国民の皆様が交通事故のない社会を願う気持ちを共有し、そのことが更なる交通ルールの遵守と交通マナーの向上につながることを心から期待しております。

結びに、本事業の実施に当たり、御協力いただいた関係の方々に厚く御礼申し上げます。

令和七年二月

警察庁交通局長 早川 智之

△主催▽

警察庁

一般財団法人 全日本交通安全協会

公益財団法人 三井住友海上福祉財団

一般財団法人 日本交通安全教育普及協会

△後援▽

内閣府

文部科学省

△協賛▽

全国共済農業協同組合連合会（JA 共済連）

目次

《小学生の部》

最優秀作〔内閣総理大臣賞〕

つなぐれたわたしのありがとう 3

千葉県我孫子市立我孫子第四小学校 三年 永野 太凰

優秀作〔国務大臣・国家公安委員会委員長賞〕

うんてんちゅうのスマホ 5

千葉県千葉市立小倉小学校 一年 松隈 唯

気もちのちがいがじこのもと 6

福井県福井市安居小学校 二年 横山 凌央

安心してくらせるまちへ 7

香川県観音寺市立観音寺小学校 三年 松本 栞奈

わが家のルール 9

長崎県長崎市立日見小学校 四年 大木 梨音

命の重み 10

愛媛県松山市立宮前小学校 五年 藤渕 悠玄

命を守るヘルメット 11

福井県坂井市立東十郷小学校 六年 小藤 柊磨

優秀作〔文部科学大臣賞〕

ぼくのおうだんぼどうのわたり方 13

熊本県天草市立本渡南小学校 二年 酒井 宗佑

佳作〔警察庁交通局長賞〕

おうだんぼどう 14

鹿児島県鹿児島市立春山小学校 一年 有村 綜真

てをあげておうだんほどをわたります	……	15
大分県大分市立野津原小学校	一年 竹山 明里	
てをつなごう	……	16
茨城県下妻市立下妻小学校	一年 谷古宇 楓	
ぜったいにわたれないおうだん歩道	……	17
兵庫県加西市立宇仁小学校	二年 鷹取 遵	
「とび出しちゅうい」気をつけて	……	19
福井県福井市松本小学校	二年 瀧口理紗子	
自てん車で出かけた	……	20
徳島県藍住町立藍住北小学校	三年 倉田 はる	
「死角」があると知った日	……	21
茨城県下妻市立大宝小学校	三年 柴 颯 翔	
あなたは被っていますか？	……	22
大阪府高槻市立阿武山小学校	四年 岩丸 琴葉	

街の工夫とぼくができること	……	24
兵庫県明石市立中崎小学校	四年 立花 樹	
わたしのお姉ちゃんのはん長さん	……	25
茨城県八千代町立下結城小学校	四年 古谷 優月	
事故で失うもの	……	26
福島県西郷村立熊倉小学校	五年 阿部 楓	
歩行者優先！	……	27
兵庫県神戸市立御影小学校	五年 川内 咲弥	
右よし、左よし、心の準備よし	……	29
山口県周南市立福川小学校	五年 宮崎 祐奈	
自分たちの事故から学んだこと	……	30
徳島県藍住町立藍住北小学校	六年 曾我部大和	
いっしゅんの出来事	……	31
愛知県豊橋市立福岡小学校	六年 中嶋 結衣	

横断歩道でコミュニケーション……………32

岐阜県各務原市立蘇原第一小学校 六年 西瀨 千紘

審査を終えて「小学生の部」……………34

宮田美恵子

《中学生の部》

最優秀作「内閣総理大臣賞」

命を守るヘルメット……………43

広島県福山市立城北中学校 三年 新田 暁

優秀作「国務大臣・国家公安委員会委員長賞」

大切な家族の命を守るために……………45

香川県高松市立山田中学校 一年 片山ほのか

油断したその先は……………46

鳥取県米子市立淀江中学校 二年 長谷川 竣

誰もが交通社会の一員……………48

栃木県宇都宮大学共同教育学部附属中学校 三年 岩佐 葵

優秀作「文部科学大臣賞」

思いやりの注意……………49

愛媛県松山市立南中学校 二年 片桐 麻帆

佳作「警察庁交通局長賞」

もしあの時ヘルメットがなかったら……………51

兵庫県神戸市立白川台中学校 一年 庄司 礎

思いやりをつくる交通安全……………52

富山県富山市立水橋中学校 一年 廣野琥太郎

姉の自転車通学と交通安全 54

群馬県前橋市立箱田中学校 一年 安原 思惟 54

とみもまた 55

東京都共立女子中学校 二年 阿部 帆夏 55

安全へ繋ぐささやかな敬意 56

千葉県柏市立柏中学校 二年 小柏 奈帆子 56

一人ひとりから始まるもの 58

埼玉県新座市立新座中学校 三年 新井 広子 58

決意の夏 59

山口県下関市立木屋川中学校 三年 中村 輔 59

審査を終えて〔中学生の部〕 62

鈴木 春男

小学生の部



最優秀作 内閣総理大臣賞

千葉県我孫子市立我孫子第四小学校

三年 永野^{ながの} 太鳳^{たお}

つながれたわたしのありがとう

「運転手さんにちゃんとお礼を言おうね。せーの、ありがとうございました。」

道路をわたる時に止まってくれた車には、かならずふり返っておじぎをしてお礼を言うようにと、お母さんはまだ小さかったわたしに教えてくれました。ちゃんとお礼を言うと、両親がとてもほめてくれたので、わたしはそれがうれしくて出歩く時は車が止まってくれるとはりきってお礼を言っていました。

しかし、小学生になってから少したつと、わたしは止まってくれた車にお礼を言うことをしなくなってしまいました。他の小学生や大人たちには、同じようにしてい

る人はいなかったので、わたしだけがふり返っておじぎをしていることがだんだんと「はずかしいな」と感じるようになってきたからです。

「お母さん、わたしは止まってくれた車にお礼を言っていたけれど、周りの人たちはそんなことはしていないし、わたしだけがやっているのがさい近はなんだかはずかしいんだ。」

ある日、わたしは少しゆう気を出してそう言ってみました。がっかりするかな？おこられるかな？などと思いましたが、お母さんの言葉はわたしの予想とはちがっていました。

「車が止まって歩行者を待つことはルールだからお礼を言うひつようはないと思うている人はたしかにいるね。でも、ありがとうを言われていやな気持ちになったことはある？」

「ないよ。うれしくて、気持ちがスツとする。」

「そうだよ。ありがとうにはすごい力があるんだよ。あなたの感じが運転手さんをうれしくさせて、次もまただれかのために止まってくれる。止まってくれた人もうれしくなる。そうやってありがとうの気持ちが名前も

知らないだれかにつながっていくんだよ。」

それを聞いた時、わたしのお礼に手をふってくれたり、え顔を返してくれた運転手さんたちがいたことを思い出しました。その後もまだだれかのために止まってくれたり、らんぼうな運転をしないように気をつけようと思ってもらえたなら、わたしのおじぎとお礼が交通事故をふせぐことに役立つかもしれません。そう思うと急にムクムクとやる気がわき上がってきました。

それからわたしは前よりも、もっとはりきってお礼を伝えることにしました。そうすると、おどろいたことにわたしがお礼をしているのを見た小さな女の子がまねをして、車に「ありがとう。」とおじぎをしていました。「わたしの行動があの子につながったんだ。」やる気のパワーをじゅう電してもらった気持ちになりとてもうれしくなりました。

みんなでありがとうの気持ちを伝え合えば交通事故のない安全な町をぎずいていけると思います。今日も、明日も、その先も小さな「ありがとう。」をわたしからどんどん発しんしていきたいと思います。



優秀作

国務大臣・国家公安委員会委員長賞

千葉県千葉市立小倉小学校

うんてんちゅうのスマホ

一年 松隈^{まつくま}唯^{ゆい}

わたしのおかあさんのおなかのなかにはいまあかちゃんがあります。おとこのこです。あかちゃんがうまれることをかぞくみんなでたのしみにしています。あかちゃんがうまれるときにはおかあさんはびょういんにおとまりするときいています。

でもあかちゃんがうまれるよていのひよりずっとまえに、おかあさんはびょういんにおとまりすることになりました。くるまをうんてんしているときに、うしろからぶつかってきたくるまがいて、じこにあってしまったからです。スマホをみながらうんてんしていたひとがぶつかってきたとききました。

おかあさんはおなかをくるまのハンドルにぶつけてしまつて、こしのほねにひびがはいってしまいました。おなかのあかちゃんはじこのあと、うまれてしまいそうになったけれど、おなかにぎゅつとしがみついてくれたからぶじだったとおかあさんがおしえてくれました。

くるまはうしろがわがペチャンコになつてしまいました。おかあさんがじこのあとくるまをみて、こどもたちがのつていなくてほんとうによかったとなんどもいっていました。

「なんでスマホをみながらうんてんしていたのかな。」
おとうさんやおとうとはなしました。どうしても、うんてんちゅうにスマホをさわらないといけなかったのかな。なにかれんらくをいそいでいたのかな。おとなにはいろいろなりゆうがあるのかもしれないけれど、わたしはもうこんなじこはいやだなとおもいました。

「シートベルトつけたかな。しゅっぱつ、しんこう！ レッツゴー！」

いつもうんてんせきからおかあさんがいつてくれるあいことばです。おかあさんはじこのあと、きをつけてうんてんしていてもじこはおきてしまうことがあるから、

かならずシートベルトをきちんとつけようとはなしてくれしました。

わたしは、スマホをみながらうんてんすることでおきるじこがなくなつてほしいです。うんてんちゅうにはうんてんにしゅうちゅうして、スマホをみることをやめて、まわりをきをつけてみてもらいたいなどおもいます。

福井県福井市安居小学校

二年 横山 凌央
よこやま りんお

気もちのちがいがじこのもと

ぼくのおかあさんが、あさしごとに行くみちには、学校が二つあります。そこをおかあさんは、とく大きいけんスポーツとよんでいます。ときどき、こんなあぶないことがあった、あんなこわいことがあった、と話していて、ぼくに気をつけると言ってきます。

ぼくはいつもこう通ルールをまもつて学校に行つていきます。だから、どうして学校の近くだからといって、き

けんなんだろうと思いました。ぼくがまもっているルールは、あるいているときは、白線から出ない。車が通るみちに出るときは、一ど立ちどまる、の二つです。おかあさんにそれを言うと、

「みんながそれをしてくれると、うんてんしゅもあんしんなんだけど、みんながそうしてくれているわけじゃないからね。」

と、言いました。

「それに、うんてんしているときには、あるいている子が、つぎにどんなこうどうをとるか、よそうがつかないこともあるからね。」

とも言いました。

ある日、おかあさんがしごとに行くときに、じてんしゃの中学生がよこみちからきゅうにやつてきて、車の前をおうだんしないでカーブして行きました。中学生は車の前をおうだんするつもりはないから、スピードをおとさずに近づいてきましたが、うんてんをしているおかあさんは、車の前にとび出して来ると思つてきゅうブレーキをかけてしんぞうがバクバクしたそうです。

これを聞いて、ぼくは中学生とおかあさんの気もちが

香川県観音寺市立観音寺小学校

三年 松本 まつもと 栞奈 かんな

ちがうことが、きけんになつてゐるのだと思いました。
だからぼくは、気もちのちがいをなくすと、じこがおこ
りにくくなると思いました。

じてん車やあるいてゐる人は、つぎにそっちに行くよ、
という気もちをうんでんしゅに知らせるために、一ど立ち
どまつたりすることが大切で、うんでんしゅは、じてん車
やあるいてゐる人がこっちに来るかもしれないと、ずっと
よそうしてうんでんすることが大切だと思いました。

「だって、じてん車にウインカーはついていないしね。」
と、ぼくが言つたら

「あ、本とうだ。あればいいのにね。」

と、おかあさんははつとして、おどろいていました。

ぼくはあるくとき、車が通るみちに出るときは一ど立
ちどまつていたけれど、もつとうんでんしゅに、ぼくが
つぎにどっちに行くかわかるように気もちをこめて、と
まりたいなと思ひました。

安心してくらせるまちへ

私は、一年生の時に、交通じこにあいました。横だん
歩道をわたつてゐた時に、相手のふちゅう意ではねられ
ました。わたしは、けがをして、とてもいたかつたです。
そのきずあとは、まだのこつてゐます。おい者さんからは、
「このきずは、ずつときえません。」

と言われました。交通じこにあつてから、車を見ると、
こわくなつてしまひます。学校も、一人で歩いて行くこ
とができなくなりまひました。それから、毎日お母さんに送つ
てもらいながら、登校するようになりました。車を見た
だけでも、泣いてしまひ日もありました。遠足も、先生
と手をつないで歩き、横だん歩道をわたる時は、きんちよ
うしました。

それから二年たつて、三年生になつてからは、車への
きょうふ心もだんだんと少なくなつてゐます。しかし、
今でも、マナーのわるい車を見ると交通じこのことを思

い出します。今日も、信号むしをする車を見ました。とてもあぶなくて、きけんだと思いました。登下校中、横だん歩道をわたっているのに、車がそのままつこんで来ることもあります。歩行者をゆう先せずに車を運転している人は、気をつけてほしいです。けいたい電話をそうさしながら運転している人もよく見かけます。交通ルールやマナーを守らないことで、大切な命がなくなっているのです。そして、私のように、命は助かって、そのきずや、心のいたみがきえずに苦しんでいる人もたくさんいるはずですよ。

交通ルールは、ぜったいに守らないといけません。車のこわさ、自転車のこわさをもつと考えてほしいです。香川県は、全国へきにも、交通じこが多い県だと聞きました。子どもも、はたらく人も、お年よりの人も、みんなが安心してくらせるまちをつくるためには「少しでも大じょうぶ」「ばれなかつたら大じょうぶ」「いつもの道だから大じょうぶ」と思わず、ふちゆう意の原いんをなくしていくことが大切だと思います。

私は、歩行者としてちゆう意しています。道を歩く時は、車道に出ないように、なるべく右がわを真つ直ぐ歩

くようにしています。信号機が点めつしたら、横だん歩道をわたらずに、下がって止まるようにしています。交差点では、左右をよくかくにんしてから、手を高く上げてわたります。細い道で車が通る時は、立ち止まって通りすぎるのを待ちます。

これから、「自分の命は、自分で守る」の言葉をむねに、気をつけて生活していきます。そして、「大切なだれかの命も、みんなで守る」ことができたなら、交通じこは、なくなっていくと思います。心のふちゆう意をなくし、みんなが交通安全にちゆう意して、安心してくらせるまちになるように、わたしも呼びかけていきたいです。

長崎県長崎市立日見小学校

四年 大木^{おおき} 梨音^{りおん}

わが家のルール

私は、夕焼けの空が一番好きです。日がしずみ、オレンジ色からだんだん暗くなる、この世界観に心をうばわれるからです。また、雨がふり出しそうな空も好きです。辺りはうす暗く、なんとなく雨のにおいがしてきます。そんなひとときに、愛犬と散歩するのが楽しいです。愛犬も散歩が大好きで、うれしそうに私の顔を見上げます。「風が気持ちいいね、空がきれいだね。」そんなことを話しかけながら、歩いています。しかし、夕方は車がたくさん通り、道がせまい場所もあって、車が私のすぐ近くを通ってひやひやします。夕ぐれ時は、一日の中で歩行者が死ぼうとする交通事故が多い、きけんな時間帯だそうです。また雨の日は、し界が悪くなり、道路がぬれたことで車がスリップし、事故を起こしやすいそうです。いつ事こにあうかは、だれにもわかりません。しかし、交通ルールを正しく守ることで、事故をふせぐことができます。

るので。

私は、犬の散歩において、家族と話し合って決めた約束事があります。それは、次の四つのことです。一つ目は、必ず母といっしょに行くことです。夕方といつても、私だけで外出するのはあぶないので、母と散歩に行きます。二つ目は、ライトを持って行くことです。ライトがあれば、ドライバーがいち早く歩行者に気付くことができます。三つ目は、車を通る時は、犬の方を向いて横向きに立って止まることです。横向きになることで、体の面積が小さくなり、車が通りやすくなります。またかべを作ることで、犬の飛び出しをふせぐことができます。四つ目は、万が一事こにあった場合、近くの大人に助けを求めることです。母が対応できればいいのですが、私しか動けない場合、自分で助けを求め、きちんとしようきょうを説明できなければなりません。事こにあった場合、あせってしまい、正かくなじょうほうを伝えられなくなるかもしれません。私の家では、日ごろから順じょう立てて話をする訓練をしています。そうすることで、いざという時、要点をつかんで話すことができます。私は、ずっとこの四つの決まりを守っています。

車を運転するためには、自動車学校に通い試験に合格して、運転めんきよしようを取とくしなければいけません。しかし私達歩行者は、歩くためのめんきよしようを取とくするわけはありません。交通事こにあわないために、どうすればいいのかわ自分で学び、実せんすること大切です。私はこれから、交通ルールを正しく守り、犬の散歩を楽しもうと思います。散歩をすることは、全身運動になって健康に良く、ストレス発散にもなります。また愛犬とのきずなも深まり、一石二鳥です。老犬ですが、愛犬が少しでも長生きできるように、夕焼け空の散歩を大切にして、歩いて行こうと思います。

愛媛県松山市立宮前小学校

五年

藤^{ふじ}瀧^{がち}
悠^{ゆう}玄^{げん}

命の重み

去年の四月末、家族で遠出した帰り道、運転していたお父さんが突然、車を道の横に寄せて停止しました。そ

して真剣な声で、

「対向車が横から出てきた自転車をはねた。一切動かない。誰も電話してない様子だし、電話する。生きているといいけど…」

と、車内から電話をかけ始めました。その時、弟は寝ていて、お母さんは見えてなくて、僕も見えなくて。お父さんが降りて近づき、様子を説明していました。はねた運転手さんも車から降りていて、でも顔が真っ白で、何もしゃべっていませんでした。その車には赤ちゃんと女の人も乗っていました。まったく動かない道路に倒れた男の人は、周りの人から、

「お兄さん、頑張れ！もうすぐ救急車くるよ！頑張れ！あとちょっと！」

と、口々に励まされていました。日帰り旅行で楽しい気分だったのに、僕は今までにないくらい、ドキドキして、頭と心の中が一気にぐちゃぐちゃになりました。不安と心配で怖くなりました。警察官と救急隊員の人たちが来て、僕たちもようやく家に向かって出発しました。

それまで、親に「危ないから飛び出さないでね」や「道路は気をつけて」と言われても、その言葉を軽く考えて

いました。あの日以来、目に焼き付いて慎重になりました。事故が起きると、被害者、加害者、目撃者、みんなが大変になることがわかったからです。命は大事とわかっていても、どこか実感できていなかった僕は、初めて命の重さを心から知りました。あの日、気になって、ニュースを探しました。僕たちが目にした事故は、「頭を強く打ち、意識不明の重体」と流れていました。その後もずっと気になり、何度もネットを探しましたが、意識不明の重体から元気になったかどうか、今もわかりません。

一瞬の出来事で人生が大きく変わります。加害者も被害者も、いつ誰がなるかわかりません。僕は弟に、道路での安全をたびたび言うようになりました。運転する親にも、今までは安全運転で別の車に抜かれた時「遅い」と文句言っていたのが、今は「もっとゆっくり」と反対のことを言うようになりました。道を横断する時は、信号機があってもなくても、手をあげるようになりました。それは、僕の命を知らせる大切な合図だからです。そうすることは、待ってくれている家族の安心と幸せにつながることもあるからです。加害者をつくらないことに

もなると思います。事故を見た後、車内でいっぱい話しました。誰の命もひとつだけで、尊くて、守らないといけないことを再確認しました。自分の命は自分で守る、それは自分のためでもあり、僕を宝ものに想ってくれている人たちのためでもあります。世の中から交通事故が無くなるように、僕は今日も願います。

福井県坂井市立東十郷小学校

命を守るヘルメット

六年 小藤 柊磨
こ ふうじ とうま

「めんどくさいでかぶらーん。」
とか、

「カッコ悪いでかぶらーん。」
とか、そのような声がぼくのまわりでもよく聞くことがあります。

去年の四月から、自転車に乗る時はヘルメットをかぶることが努力義務になりました。ぼくの小学校では、学校ル―

ルで自転車に乗る時は必ずヘルメットをかぶるルールに決まっています。だから、ぼくも本当は少し恥ずかしい気持ちもあるけれど、必ずヘルメットをかぶって自転車に乗るようにしています。

ぼくのお母さんの弟は、小学校三年生の時に自転車に乗っていて、大きな道路に飛び出して、交通事故にあいました。意識不明の重体になって、何度も大きな手術をしたそうです。なんとか命は助かりましたが、おじさんは今は車いす生活だし、脳にも障害がのこっています。もしも、おじさんが子供の時にヘルメットをかぶって自転車に乗っていたら、事故にあってしまっただとしても、ここまで大変なことにはならなかったかもしれません。頭は体の中でも一番大切なところなので、そこを守っていたらちがったのかもしれないですね。

おじさんが子供の時にヘルメットをかぶることが義務だったら、みんなきちんとかぶっていたと思うので、とても残念に思います。

みんな、めんどくさいとか、カッコ悪いとか、恥ずかしいとか、そんなくだらない理由でヘルメットをかぶらないで、大変なことになって後かいしても、おそいということ

を分かってほしいです。お母さんはその気持ちがだれよりもよく分かっているから、ぼくにヘルメットの大切さと必ずかぶるようにしつこく言ってきます。なので、ぼくも、自分のために、家族のために、みんなのために、必ずヘルメットをかぶります。

今はまだ、法律では努力義務だから、絶対かぶらなければならぬわけではないから、ぼくのまわりでもかぶっていない人もいるけれど、早く絶対かぶらなければいけない法律になればいいなあと思います。そうすれば、恥ずかしいとか関係なく、みんなきちんとかヘルメットをかぶると思うし、もしも交通事故にあってしまっても、かるくすむこともあるかもしれないし、そうすれば悲しい思いをする人もへるのではないかなと思います。

自転車の人がヘルメットをかぶるだけで、交通安全になるとは思わないけれど、車を運転するお父さんやお母さん、おじいちゃんおばあちゃんたちは本当に気を付けて、よそ見などや居ねむりなどしないように運転してほしいし、道路をわたる人は、安全確認をしつかりしてわたってほしいし、みんな自分ができることをしつかりして、みんなで交通安全に気を付けて、事故のない安全な世界になって、辛

いい思いや悲しい思いをする人がいなくなるといいなあと思います。



優秀作

文部科学大臣賞

熊本県天草市立本渡南小学校

二年 酒井 宗佑
さかい そうすけ

ぼくのおうだんはどうのわたり方

どうしたら、じこにあわないか家ぞくと話しあいました。そのけっか、車がとまっているかたしかめることでした。

とまっている車をどうやってたしかめていますか。ぼくは、耳で音を聞きます。ぼくがどうろをわたつていなくても、車がとまっているか考えています。こうさ点は、耳で聞いて、たてに車がうごいているか、よこに車がうごいているかたしかめています。みちをわたらないときは、点字ブロックの上にあるいています。点字ブロックにかかとをそろえてわたるとまっ直ぐあるくことができます。

学校のじゅぎょうでは、先生に手びきをしてもらってどうろをわたるれんしゅうをしています。先生から

「おとうさんか、おかあさんに手びきをたのんでみてください。」

といわれたので、ぼくが家にかえって

「手びきおねがいね。」

とおねがいました。家ぞくとあるいていどうしているときに後ろから車がかいていることがわかりました。たてのみちから車がかいているなあと思いながら、

「今、後ろから車がかいているね。」

といいました。そうしたらおかあさんが

「前からもきているよ。」

とこたえてくれました。ぼくは、しんごうが見えていません。かくにんしないと車とぶつかってしまいます。だから、耳で聞くことがだいじだなと思いました。

今は白じょうをつかわずに、だれかといっしょに手をつないであるいています。だから、いつか白じょうをもつて一人であるいてみたいです。

ぼくは、このように車の音を聞いて、点字ブロックに足をそろえて、おうだんほうどうをわたっています。耳がぼくのしんごうです。これからも、車の音を聞いておうだんほうどうをまっ直ぐわたりたいです。

佳作

警察庁交通局長賞

鹿児島県鹿児島市立春山小学校

おうだんほうどう

一年

有村 ありむら

綜真 そうま

ぼくは、ことしのしがつにしようがくいちねんせいになりました。

がっこうへはあるいてかよっています。とうこうは、とうこうはんのみんなと、げこうはおなじいきのおともだちといっしょです。がっこうへのみちはすこしせまくさきが見えにくいところもおおいです。くるまもたくさんとおっています。みちにひろがらないようにほどうのはくせんのうちがわがあるき、おしゃべりにむちゅうにならないようにまわりをよくみるようにきをつけています。

はじめてのことがおおくて、さいしょはすこしきんちようしていました。でもみんなとうげこうをくりかえして

いくとだんだんきんちようもすくなくなっていきました。

がっこうせいかつにもなれてきたあるひのげこうちゅうに、おうだんほどうをわたろうとしたらまがつてきたくるまがすごいいきおいでせまつてきてきゅうぶれーきでとまりました。おうだんほどうのしんごうはあおだつたのでぼくはとてもびつくりしました。いえにかえつておかあさんにおうだんほどうではなしをすると、とてもおどろいてけががなくてよかったといつてくれました。そのあとになにがげんいんかおしえてくれました。おうだんほどうがあおのとき、おなじむきのくるまのしんごうもあおなのでまがつてくるくるまがいるそうです。なのでおうだんほどうのしんごうがあおだからくるまがこないとおもっているとおぶないとおしえてもらいました。いままでもおうだんほどうをわたるときにはちゃんとみぎひだりをみてわたっていました。いままでもいじようにきをつけたいとおもいました。

とうげこうになれていたのですこしきがゆるんでいたかもしれません。こうつうじこにあわないうようにいろいろなことにきをつけたいとおもいました。

大分県大分市立野津原小学校

一年 竹山^{たけやま} 明里^{ひかり}

てをあげておうだんほどうをわたります

わたしは、ことし1ねんせいになりました。こうつうしどういんになったおかあさんと、あるいて、しょうがつこうにかよっています。

がっこうまでのみちで、スピードをだしてはやくるまはこわいです。スマホでよそみをしているくるまのひとがおおいです。

おうだんほどうで、まっているのに、くるまがとまりません。こうつうしどういんの、おとうさんとおかあさんが、たつてとめてくれると、すぐくるまがとまりわたれます。

まいにちけいさつのひとが、たつてくれたら、すぐくるまがとまつて、みんながわたれるのになあーとおもいます。

わたしが、あおしんごうで、おうだんほどうをわたつてるとき、くるまどくるまがぶつかりました。とてもこわかったです。

こうつうしどういんの、おとうさんとおかあさんが、
おうだんほどうをわたるときに、いうことばがあります。

「てをあげて、おうだんほどうをわたりましょう。」

です。わたしは、いつもてをあげてわたります。

わたしのおにいちゃん、てをあげてどうるをわたっ
ていました。でも、スピードをだして、よそみうんてんの、
おじさんのくるまに、ひかれてしんでしまいました。

だからわたしは、おにいちゃんにあったことがあります。
せん。いえに、しゃしんがいつばい、かざってあります。
あいたかったのに、おにいちゃんにはあえません。かわ
いそうです。しんだらもどらない、かなしいです。

おそらで、おじいちゃんとおばあちゃんと、うさぎさ
んとかえるさんと、おつきさまのなかで、いっしょにも
ちつきをして、たのしくたべているとおもいます。

100ねんご、あいにくいます。それまでこうつうあ
んぜんをして、まいにちてをあげて、おうだんほどうを
わたります。

くるまのひとは、とまってくください。スピードうんてん、
よそみうんてんは、しないでください。おねがいします。

おこさず、あわず、じこゼロに!!

てをつなごう

「てをつないでからいこうね。」

ちいさいころから、そとにでるときはおかあさんにい
われていました。

でも、ぼくがまだほいくえんせいのに、やくそく
をやぶって、ほいくえんのちゅうしゃじょうでかつてに
くるまのドアをあげて、ほいくえんのもんまではしつて
いこうとしたことがあります。

「あぶないよ。」

と、おかあさんにおこられました。そのときは、どうろ
じやないのになんでおこるんだろうとおもいました。

しょうがくせいになって、おかあさんといっしょにお
とうとのほいくえんのおむかえにいったとき、おとうと
がはしつてもんからでようとししました。ぼくがおいつい
て、おとうととてをつなぎました。

そのとき、ほいくえんせいのおかあさんにいわ

兵庫県加西市立宇仁小学校

二年 鷹取 遵たかとり まもる

ぜつたいにわたれないおうだん歩道

れたことをおもいました。ちゅうしゃじょうは、くるまをとめるのにバックするときがあるからとてもあぶないこと。ちいさいこは、くるまのしかくというものになつてしまつてみえないことがあること。くるまはきゅうにとまれないこと。

それからぼくはそとにでるときは、

「にいいとてをつないで、ゆっくりいこうね。」

と、おとうととやくそくをします。

ぼくは、おとうさんとおかあさんがぼくのをぎゅつとしてまもつてくれたみたいに、おとうとのてをぎゅつとしてまもつてあげたいです。

そして、こうつうあんぜんのこともおしえてあげたいです。

「ほら。やっぱり、車なんかこなかった。」

ぼくは、そう思った。それなのに、近道できてうれしい気もちと、やくそくをやぶつてくるしい気もちとで、とてもふくざつだった。ぼくの家から小学校に行くときに、そのおうだん歩道はある。そこをとれば、小学校まで歩いて三分、自てん車にのれば一分で行ける。一ばんの近道だ。だけど、パパはぜつたいにわたらせてくれない。

パパがすすめてくる道は、かんたんに言うとうう学ろだ。いったん小学校からはなれて、歩道きょうをわたるから、歩いて五分い上かるし、自てん車では行けない。小学校につくころには、つかれてあそぶパワーがなくなっている。ぼくはなんどもはろんした。おねがいしたり、おこつたり、近道のよいところをつたえた。だけどいつもパパは、

「かならず歩道きようをつかいなさい。」
と、言った。

なぜそのおうだん歩道をわたらせてくれないかという
と、U字カーブのてっぺんにあるからだ。見とおしはか
なりわるい。だけど、あまり車も人もとおらないので、
たまに来る車はスピードを出している。だからぜったい
にわたらせてくれない。

でも、ぼくは一回だけそのおうだん歩道を内しよでわ
たった。その日ぼくは、お友だちと小学校のうんどう
じようでまちあわせをしていた。行くと中、歩道きよう
の上から道ろを見て、「ほら、やっぱり車なんかこなかっ
た。近道したらとくに小学校についているのに。」と、
ちよつとイライラした。夕方までクタクタになるほどあ
そんだかえり道、ぼくは、はじめてそのおうだん歩道を
わたった。ちゃんと右左を見て車が来ていないのかをかく
にんしたし、いそいでわたった。近道できたはずなのに、
やくそくをやぶってふくぎつな気もちで歩く道は、いつ
もよりとっても長くかんじた。家にかえると、げんかん
の前で見ていたパパはカンカンにおこっていた。

「夕ぐれは、歩行しゃがいつもより見にくい。たまた

ま今日は車が来なかったけど、車が来たらあぶないから、
つぎからぜったいに歩道きようをわたりなさい。」

と、言ったパパの顔は少しかなしそうにも見えた。

そのとき、「もしも」を考えた行どうをしないといけ
ないと思った。もしもスピードのはやい車が来たら、も
しもぼくに気づかず止まらなかつたら、もしもぼくがと
中でこけてしまつたら、きつとぼくはじこにあうと思う。
そうなれば、家ぞくみんなにかなしい思いをさせてしま
う。よりあんげんな道があるなら、そっちをえらばない
といけなしいと思った。

あの日からぼくは、そのおうだん歩道をわたりたいと
は思わないし、ぜったいにわたらない。だれかに見られ
ていなくても、車がこなくとも。

福井県福井市松本小学校

二年 瀧たきぐち口 理紗子りさこ

「とび出しちゅうい」 氣をつけて

わたしのおじいちゃんの家の前に、とび出しちゅういの男の子のかんばんがあります。小さいころは、元気な男の子のかんばんがなんであるのか、わかりませんでした。でもよく見ると、男の子は、はしっていることに気がつきました。きんじよのほいく園の入り口や、近くの家のガレージのかどにも、よくにたかんばんがおいでありました。

このかんばんは、たてものや、まがりかどから、子どもがとび出してくることを、じどう車やじてん車の人に気づいてもらうためのものだと、おじいちゃんに教えてもらいました。わたしやおとうとがあるけるようになって、そこに出ることが多くなったので、ホームセンターで買ってきたそうです。おとうとや妹は、お出かけがうれしいと、はしって家をとび出してしまうので、いつもちゅういされています。わたしはじぶんで氣をつけてい

るけれど、もっと小さい子は、すぐにわすれてとび出してしまので、そこに出るときはとび出さないように、声をかけたり、手をつないだりして、氣をつけています。

わたしのおばあちゃんは小学三年のころ、じてん車のつたおじいさんに、足の先をひかれたことがあります。おじいさんは、子どもをじてん車の後ろにのせていてふらついてしまい、おばあちゃんの足の先にのり上げてしまったのです。あつ！いたい！と思ったときには、じてん車のおじいさんは、とおくに行つてしまいました。足のお先におもたいてん車がのり上げたので、しばらくいたかったそうです。この話を聞いて、いくら氣をつけてあるいても、あぶないことはむこうからやってくるんだと思いました。じどう車やじてん車の人も、みちをあるく人も、じこがおきないように、よく氣をつけないといけないなと思いました。

とび出しちゅういのかんばんのほかにも、町の中にはいろんなどうろひょうしきやかんばんがあります。「とまれ」や「おうだんはどう」「スピードおとせ」「ふみきりあり」など、どれもじこがおきないようにぶつけています。わたしはおじいちゃんとおばあちゃんの話の聞

いて、じこにあつてからではおそいんだなと思いました。

わたしがつづけていることは、おうだんほどうやみちをわたるときに、右見て左見て、また右を見てわたることです。おうだんほどうでも車がとまってくれないときがあります。そんなときはあわててとび出さず、まわりをよく見てわたります。きゅうにとび出すと、車の人もびっくりしてしまいます。じこにあわないようにするには、あるく人もうんでんする人も、どちらも気をつけないとだめだなと思います。「とび出しちゅうい」に気をつけて、これからもみちをあるこうと思います。

徳島県藍住町立藍住北小学校

三年 倉田^{くらた} はる

自てん車で出かけたい

一学きに交通安全教室がありました。わたしの通う小学校では、三年生で交通安全教室をうけた後からは、子どもだけで出かけてもいい決まりです。わたしは友だち

と夏休みに学校の近くでまち合わせをして、友だちの家に遊びに行く計画を立てました。家に帰ってそのことをお母さんに伝えると、いつしよに自てん車で走ってみて、どんなきけんがあるか考えてみるようになりました。

わたしはふだん出かける時は車にのっついて、自てん車で出かけることはほとんどありません。自てん車で出かける時は、お母さんかお父さんが前を走って「右にまがるよ。」「だんさに気をつけてね。」、と声をかけてくれます。だから、子どもだけで自てん車で出かけるには、ちゃんと道をおぼえて、あぶないことには自分で気がつけるようにならなければいけません。

わたしが先頭になつて、いつもよりゆっくりと、まわりに目をくぼりながら自てん車で走ってみると、ヘルメットをかぶること、信号をまもることなどのき本てきな交通ルールのほかに、気をつけなければいけないことがあることがわかりました。

一つは、後ろのかくにんは止まって足をつけてからすることです。自てん車をこぎながら後ろを見ると、バランスをくずしてこけそうになるし、ふらついて車道に大きくはみ出すことがあり、とてもあぶないです。はみ出

茨城県下妻市立大宝小学校

三年 柴^{しば}
颯^{はや}翔^と

してきた自てん車を、車があわててよけるのを何どか見ました。

もう一つは、道路ぞいにあるちゅう車場にとまっている車に気をつけることです。信号がないので、きゅうに車が車道に向かつて動き出すことがあります。特に、後ろ向きにとまっている車の運てんせきからは、見えるはんいがとてもせまくて、自てん車が来ていることに気づかず、車道に向かつてさがってくる場合があります。

自てん車で出かける時は、自分ののり方だけでなく、車の動きにもちゅういすることがひとつだとわかりました。少しでもあぶないと感じた時は、すぐに自てん車をとめて安全をかくにんして、楽しく出かけられるようにしたいと思います。

「死角」があると知った日

ぼくは、小学三年生です。

一人で自転車にのって道路を走ることが出来るようになります。ぼくは母に

「一人で自転車にのって遊びたい。」

と何でもたのみました。でも道路を走る練習をしてからにしようと、ぜんぜんのことが出来ません。

夏休みになり、ぼくは運転席、母は助手席にすわりサイドミラーを見ているように言われました。

びっくりしました。

後ろから歩いてきた父がミラーからきえたのです。次に小学一年生の妹に、車の前と後ろに立つてもらいました。前後とも小さくてかくれてしまい、すがたがぜんぜん見えませんでした。それが「死角」と言うことを教えてもらいました。そして、車のまきこみについても教わりました。「死角」に入ってしまうとどうなる？と聞か

大阪府高槻市立阿武山小学校

四年 岩丸 いわまる 琴葉 ことば

あなたは被っていますか？

れて、ひかれてしまうと思いました。「死角」に人がいるかをかくにんするには、運転手が目で見てかくにんするしかない。でも、かくにんしてくれる運転手ばかりではない。その「死角」に颯翔がいたらじこにあつてしまう。死んでしまうかもしれない。一人で自転車にのって道路を走るということは、自分で自分の身を守り車の動きをかくにんして、運転している人の顔を見る。ぼくに気づいていない時は止まって待つ。これが守れないと自転車をきよかすることは出来ないと言われました。

運転をしていると歩行者、自転車はあたり前のように車のわきをすりぬけ、青しんごうでつつ走る人が多いと母から聞きました。かくにんをしてなかったら、じこになつていたなと思っただけいけんが何度もあるそうです。右左折をする車、ちよくしんする自転車、いつしゅんの「死角」に入っていたらどうなるか。車を運転する人は、ぜったいに目でかくにんしてください。歩行者、自転車は車の動きを目でかくにんしてください。

「死角」を知ってぼくはこわくなりました。これから自転車で道路を走る練習をして、きけんなことなどをべんきょうしていこうと思います。

安全確保を意識して生活している人は一体どれくらいいるのでしょうか。毎日街中を見ていて、人は身を持って体験経験をしないと実感出来ないだろうな、と私は思うのです。

二〇二三年四月から自転車のヘルメット着用が努力義務化になりました。スポーツバイクに乗っている人はヘルメットを被っているのに、シティサイクルに乗っている人は被らない人が多い。なぜ？自転車は軽車両扱いなので原則車道（例外はある）を走る。とても危ないと思うのです。ヘルメットを被ると暑いから？髪型が崩れるから？私もその一人でした。私は単に『めんどくさい』と思っていました。母によく、

「自転車時はヘルメット！チャリヘル！」（チャリ（自転車）ヘル（ヘルメットとヘルプ）を混ぜた造語）と言われ続ける毎日でした。

そんなある日、母と自転車に乗って出掛けていた時の事です。私は直進から左に曲がろうとした時、ブレーキのタイミングが合わず上手く曲がり切れずに目の前の壁にドーンとぶつかってしまったのです。私は転倒しました。啞然としました。そして心臓がバクバク冷や汗が出て来てとても怖くなりました。手と足を打撲、皮がめくられて出血していました。母が自転車を降り、すぐかけつけて来ました。

「こっちゃん！大丈夫!?ちゃんと見てあげてなくてごめんね！頭は打ってない!？」

私はハッとしました。ヘルメットを被っていたので当然無キズでした。

「ヘルメット被っていたから大丈夫だよ」

私はその時思いました。『ヘルメット被っていなかったらどうなっていたのだろう・・・』『ヘルメットに命を助けられた』と言っても過言ではないと思いました。

自転車事故で亡くなった人の約七割が、頭部に致命傷を負っているそうです。

ヘルメットを着用しないと死亡率が約三倍！それでもヘルメットを被らない理由はあるのでしょうか？もし事

故で大怪我をしたら、本人だけではなく家族や友人をも悲しませる事になる。それは絶対にあってはいけない事なのです。

私は今ではヘルメットは相棒だと思っています。自転車時だけではなく、通学の時にも被ろうかな？と思っています。反射シールも貼って、カッコ良さ倍増です！

私はこの経験をこの作文に書く事で、一人でも多くの人の目に止まれば良いと考えました。

毎日近所で自転車に乗っている人を見かけますが、ヘルメットを被っている人はほぼ見かけません。私は複雑な気持ちになります。声を大きくして伝えたいです。

『命より大切なものはありますか？後悔する前に、ヘルメット!』と。

私は今日も『チャリヘル』で自転車を楽しく、そして安全に乗ります！

兵庫県明石市立中崎小学校

四年 立花 樹たちばな たつき

街の工夫とぼくができること

ぼくは今年、色覚検査を受けました。検査結果は赤色の見え方に少し異常があると言われました。「でも信号や標識はちゃんとわかってるし、大人になったら車の運転免許も取れます。生活には大きな問題はありませんので大丈夫ですよ。」と病院の先生に言われました。

たしかに、小さいころから信号のことや横断歩道のわたり方など交通ルールはお母さんが教えてくれたからわからないことも赤が理解できないこともなかったです。

ぼく自身の症状が軽いものと言うものもあるかもしれないけれど、街の中にもいろいろな工夫がされているんだと調べて知りました。

標識などは色を間違わないように、にている色を使わないようにしていたり、色がわからない人のために形やマークを利用して表現してありました。階段などの色が同じで段差のわかりにくい物にはふちの部分に明るい色

がぬられています。

他にも工夫があり、目が見えない人のために信号機から音で知らせるようになっていたり、点字ブロックを使用していたり、車いすや歩くのがゆっくりな人のためには青信号えん長ボタンがあったりします。

あたり前のことのように見たり聞いたりしていた物だけど、全ての人が安全にくらせる街づくりがされているんだとあらためて知りました。

でもどんなに街に工夫がされていても使う人がルールを守らなければ全ての人が安全とは言えないこともわかりました。歩きながらのスマホの使用や、イヤホンをつけて自転車に乗ること、点字ブロックをふさぐような自転車の止め方などは、目や耳が不自由な人にはとてもめいわくになるし、大きな事故にもつながります。

ぼくも自転車に乗るので、どんな人でも安全にくらせるように、そしてぼく自身がぼくを守るためにも、学校の交通安全教室で習った自転車の乗り方やヘルメットの着用、交通ルールを守り、マナーも守っていききたいと思います。

茨城県八千代町立下結城小学校

四年 古谷 優月ふるや ゆづき

わたしのお姉ちゃんはん長さん

わたしのお姉ちゃんは、今年から登校はんのはん長さんになりました。先頭に立つて歩くすがたを見て、かつこいいなとも思います。そんなお姉ちゃんに、はん長として気をつけていることを聞きました。そうしたら、「そんな大したことはしてないよ。」

と答えが返ってきました。でもわたしは知っています。歩いている時に、はんがはなれすぎないよう、いつも後ろを気にして下級生にスピードを合わせてくれること。車道がわにはみ出した時には、すぐに注意してくれるたりします。家ではよくケンカもするけれど、はん長のお姉ちゃんはとてもかっこよくて大すきです。

お姉ちゃんと、どうすれば交通事故にあわないですかを話し合いました。その時にお父さんが、

「小学生はどういった事故にあっているのか調べてみよう。」
と言ひ、茨城県けいさつ本部のホームページを見せてく

れました。いばらきの交通事故令和五年ばんを見てみると、十年前からくらべて、事故の件数はだんだんへってきていますが、令和五年は、百七十四人の小学生が事故にあっていることが分かりました。その中で、自転車での事故は四十四人、歩行者の事故は二十五人でした。自転車事故の原いんは、じょ行い反、安全不かくにんが多く、歩行者の事故の原いんは飛び出しが多いということでした。そして、歩行者の事故は、登下校の時の、道路を横だん中に起こることが多いと分かりました。

茨城県の小学生の事故について調べてみて、自分たちは何に気をつければいいか、お姉ちゃんと考えてみました。登下校中の事故が多いので、しっかり前を向いて、一列で歩くようにしたいです。そして、横だん中もあぶないので、信号が青になってもすぐにわたるのではなく、右左右を見て、車に乗っている人に見えるように手をあげて横だん歩道をわたるようにしたいです。それと、自転車に乗る時は、ライトやベルをたしかめて、ヘルメットをきちんとかぶることをわすれないようにします。自転車事故は、出会い頭の事故が多いと書いてあったので、スピードを出しすぎないで、曲がり角ではきちんと止ま

るようにすれば、事故にあわないですむのではないかと
思いました。

お姉ちゃんは六年生なので、登校はんでいっしょに学
校に行くのも、もう少ししかありません。お姉ちゃんが
いなくても、教えてもらったことをしっかり守って、交
通安全に気をつけたいと思います。そして、もしわたし
がはん長さんになることがあったら、お姉ちゃんと同じ
ように、しっかりしたはん長さんとして、下級生の安全
を守りたいと思います。

福島県西郷村立熊倉小学校

五年 阿部 楓^{あべ かえで}

事故で失うもの

私にとって交通事故は、あまり身近なものではありません
でした。ふだんから、道路を歩く時にはすごく気を
つけているので、あぶない思いをした事も無かったし、
交通事故を見た事ありませんでした。

でも、私が四年生の時、おじいちゃんが事故にあいま
した。自転車に乗っていて車とぶつかり、車のボンネッ
トから地面に落ちて、救急車で運ばれました。事故があっ
た場所は、家の近くで私もよく通る道でした。事故があっ
た時、私は家において救急車のサイレンが聞こえていまし
たが、まさかおじいちゃんが事故にあっているとは思わ
なかったの、おばあちゃんから聞いた時とてもびっく
りました。おじいちゃんは、自分で歩いていて大丈夫
と聞いた時、とてもほっとしました。

私は、ふだんから通っている道で事故が起こった事に
おどろいたし、自分が気をつけていても、ある日とつぜ
ん事故にあう事もあるんだなと思いました。

おじいちゃんは、見た目には大きなけがはありません
でしたが、体の色々な所にいたみや不調が出てしまい、
何ヶ月も仕事に行く事ができず、しゅみの山登りやサイ
クリング、スイミングにも行けなくなっていました。
たくさんさんの検査をしたり、リハビリをしたりして、少
ずつ良くなって、できる事もふえてきたけれど、事故前
のように今は今もまだもどれていません。

私は、交通事故で失うものは命だけではないと知りま

兵庫県神戸市立御影小学校

五年 川内かわうち 咲弥さや

歩行者優先！

した。それまでふつうにすごしていた日常も、ふつうではなくなってしまう。一度、事故にあうと体だけではなく、心にも大きなきずができてしまうと思います。事故にあった人の家族もとても悲しい思いをします。事故にあった人だけでなく、事故を起こしてしまった人、その家族も同じように悲しい気持ちになると思います。悲しい思いをする人が少しでもへるといいなと思います。

交通事故を起こさないようにするには、自分だけが気をつけていればいいというわけではありません。歩いてる人、自転車に乗っている人、車を運転している人、みんながルールを守って相手の気持ちを考えなければいけないと思います。

これからは、自分は事故にあわないだろうという考えはやめて、毎日通る道でも、どんな危険があるか、どんな事に注意すればいいのかを考えながら生活したいと思っています。

「歩行者優先！」これは信号機のない横断歩道を渡る時にお母さんがよく言っている言葉だ。「歩行者優先！」いつの間にか私のよく言う言葉になっていた。

夏休みが始まってすぐのこと。近所の商業施設からの帰り道、「歩行者優先！」いつものようにこの言葉を信じて、信号機のない横断歩道を渡ろうとした時、私の目の前を車が平然と通過した。この出来事がこの夏の私の心に火をつけた。これが今から話す私の自由研究のきっかけだ。

この自由研究は、多くの人に交通ルールやマナーを知ってもらい、安全なまちづくりをめざすことが目的だ。

まず、私はお母さんと私の住むまちに信号機のない横断歩道がいくつあるのかを調べた。普段よく通る所、初めて通る所、全部で四十五カ所見つけることができた。そして、一つずつ写真を撮ってオリジナル交通マップを作った。

次に、実際に信号機のない横断歩道で歩行者を優先する

車の台数を調査した。結果から交番の近くの横断歩道では歩行者を優先する車が多いことが分かった。このことから、ドライバーは警察の目を気にしていると予想できた。

その次にしたのは、兵庫県警察が推進している横断歩道合図（アイズ）運動プラスを参考に、私も手を挙げてドライバーに合図を出して調査してみた。結果は何もせずに横断した時より効果的だった。

私はこの結果を持って警察署に行った。

ドキドキしながら警察官に話しかけてみた。すると、警察官は私に優しく色々なことを教えてくれた。警察は交通ルールを市民に守ってもらうために様々な取り組みをしているそう。一つ目は交通の取り締まり、二つ目は交通安全教育、三つ目は広報啓発活動。交通の取り締まりとして教えてもらって印象的だったのが、違反したドライバーに切符を切り、ペナルティとして罰金を科すということだ。

「なるほど。だからドライバーは警察の目を気にしていたのか。」

今度は、警察の取り締まりに同行させてもらった。警察官が立っていると、「あら、不思議。」ほとんどの車

が歩行者を優先するし、歩行者がいなくても速度を落とす。これにはびっくりした。予想通りドライバーは切符を切られたくないから警察官がいると交通ルールを守るのだ。今回の調査で歩行者に対して気づいたこともある。止まってくれた車を気にして小走りする人や感謝の気持ちでお辞儀をする人がいたことが良かった点だ。悪かったのは横断歩道を渡らない人やスマホを見ながら歩く人がいたことだ。

警察官がいなくても交通ルールを守ってほしい。

自分の身を守るために交通マナーを考えてほしい。

「ドライバーも歩行者もそれぞれが交通ルールやマナーを守り、お互いにゆずり合って事故のない安全なまちにしましょう！」私はこの自由研究でこのメッセージを伝えたい。

「歩行者優先！」

今日も私はこう言って横断歩道を渡り出す。

山口県周南市立福川小学校

五年

宮崎 みやざき

祐奈 ゆうな

右よし、左よし、心の準備よし

「今日も安全に登校するよ。右よし、左よし、心の準備よし。」

家を出発する時、この言葉をしっかりとむねにきざむ。気持ちにゆとりを持つ心構えは大切なので、心の準備をして、登校するようにしている。通学路は交通量が多い道路やふみ切りがある。朝は通勤ラッシュで、横断歩道をわたるのがとてもこわいけれど、保護者や見守りたいの方々の立しようのおかげで、私達は安全に登校することができ。朝早くから立しようをしてくださることに、私達は、心から感謝している。無事に登校して、授業を終えて帰宅するとほっとする。

私の父は、自動車学校に勤務していて、安全について家族でよく話し合う。青信号は、「進む」ではなく、「周りの安全を確認して進むことができる」など、安全の大切さについて話し合っている。運転手側から見ると、子

供は見えにくい時があるので、手をまっすぐ挙げるなど、自分の存在をしっかりと示すことも重要だ。視野に関しては、子供のほうが大人よりもせまいので、危険に気が付きにくい。危険がひそんでいないか、しっかりと確認することが大切だと思った。

私は自転車に乗って、母とよく買い物に出かける。四年生の時、「自転車運転免許証」をいただき、とてもうれしかったと同時に、交通安全に対する意識もさらに深まり、身が引きしまる思いがした。自転車に乗る時はヘルメットを必ず着用し、ゆっくり運転するように心がけている。せまい道路から自動車が近づいてきた時、ヒヤリとしたことがあるので、目視をして安全を確認してから運転したい。

最近、高れい者の運転に関することをよく耳にする。父が勤務している自動車学校で実しされている「高れい者講習」や「認知機能検査」には、毎回たくさんの受講者が来られるそうだ。年を重ねると運動機能や認知機能が低下しやすいので、より注意が必要だと、父が言った。私の祖父も自動車学校で、講習や検査を受講し、現在も自動車を運転している。祖父に運転する時に気を付けて

いることを聞いてみると、

「交差点を右左折する時やスーパーのちゅう車場などでは、歩行者に気を付けて運転をしているよ。」

と話してくれた。私は祖父に

「最近ハイブリッドカーが多く、エンジン音が静かで自動車に気付きにくい時もあるから、歩行も気を付けてね。」

と言った。

年れいによって、能力にちがいはあるけれど、交通安全に対する意識はどの世代も共通だと思う。命は、たった一つ。これからも交通ルールを守り、気持ちにゆとりを持って、自転車の運転や歩行など、安全に行動できるような心がけたい。

徳島県藍住町立藍住北小学校

六年 曾我部 大和

自分たちの事故から学んだこと

テレビでは毎日のように事故のニュースがある。事故で亡くなった人の事を考えると、とても悲しいが、わざとではなく事故を起こしてしまった人の事を考えても心がいたむ。

自分が三年生のころ、自転車で前を行く友達を追いかけていて、曲がり角で一時停止している車にぶつかった。相手の車には、きずがついていて、自分の体と自転車は無事だった。そのあと警察官が来て、車のドライブレコーダーを見ると、自分が左右確認せず角を曲がるのが映っていた。「やってしまった。」と思った。

相手の車の運転手の人は、自分を責めず許してくれた。お父さんとお母さんにはとても怒られた。本当だったら自分が加害者で、車の修理費を出さなくてはいけないことや、相手にケガをさせていたら、高額ないしゃ料を払ったりとんでもない事になっていたと言われた。

愛知県豊橋市立福岡小学校

六年 なかじま 中嶋 結衣 ゆい

いっしゅんの出来事

また、次の年のある日、学校が終わって家で姉の帰りを待っていると、姉の友達が家に来て「（姉が）救急車で運ばれた。」と教えに来た。その時とてもびっくりしたし、とても心配だった。姉は一時間くらいで帰ってきた。手のひらにいたそうなきずがあった。

話を聞くと、学校帰り走って丁字路に出て、車にぶつかったそうだ。車の運転手は、そのまま立ち去ろうとしていたが、近くにいた男の人が運転手を引き止めてくれ、救急車を呼んでくれたそうだ。大したケガがなくて本当によかったと思ったし、その男の人にとっても感謝した。自分も姉も左右を確認せず、自分は加害者で、姉は被害者になった。交通ルールを守らないと、簡単に加害者にも被害者にもなるし、家族やまわりの人にもたくさん迷惑をかけるということを身をもってわかった。

今回の自分たちの事故が、ニュースになるような大きな事故にならなくて本当によかったと思う。これからも、事故の加害者にも、被害者にもならないように、しっかりと左右確認し、交通ルールを守るようにしたい。また、交通事故を目撃したら、姉を助けてくれた男の人のような行動をしたいと思う。

「ドッカーン」

私は何が起こったのかわからなかった。

知らないおばさんに

「みんな早く出て」

と言われ、言われるがままに外に出た。その時、初めて現実を知ることになった。

私のおばあちゃんの車が道路の横向きに止まり、車体がグチャグチャになっている。そうだ私は車の後部座席に座っていたことを思い出した。おばあちゃんは「ごめんごめん」と言っていたが胸が痛いし救急車に乗ってしまった。となりで妹も泣き出した。私だって初めてのことでどうしていいのかわからず泣きそう。こわい夢でも見ているのか、現実なのかわからなかった。まるで遊園地の絶きょうマシーンに乗った後のような感じだった。おばあちゃんほろっ骨骨折、妹は足指三本の骨折、私は

岐阜県各務原市立蘇原第一小学校

六年 西濱 にしはま 千紘 ちひろ

横断歩道でコミュニケーション

首のあっぱく骨折といった大ケガをしてしまった。現場で警察官に後部座席でもシートベルトをしなければいけないよと言われて気付いた。私は高速道路以外は後部に乗った時シートベルトをしたことがなかった。というかしなくてもいい反ではないからと自信を持っていた。しかし今回の事故でシートベルトをしていればこんな大ケガをすることなかったと思った。今さら後かいしてもあとの祭りとわかっていたが後かいしれない。今思えば、ぶつかった時に妹はイスの下へ、私は右から左に飛ばされた。シートベルトの大切さを知った。自分の命は自分で守らなければいけないと強く思った。交通規則を守らなければ死亡することだってある。このぐらい平気なんて考えていた私ははずかしくなった。

二度と事故にあいたくないし、ケガもしたくない。どのイスに座ろうとシートベルトは必ずすると心にちかった。交通ルールは守ろうと声を大にして言っていこうと思う。

信号機のない横断歩道でなかなか止まってくれない車に、私は少し腹立たしく待っていた。すると、何台かの車が通り過ぎた後、やっと一台の車が止まり横断歩道を渡ることができた。でも、私のちょっとした心がけで、何か変わるのかもしれない。

私が小さいころ、父や母から、

「道を渡る時は、右を見て、左を見て、手を上げて渡るんだよ。」

とよく言われた。それは、低学年で背の小さな私が車の運転手さんに気づいてもらえるように、手を上げた方がいいのかと私は思っていた。けれど、自分の身長も伸び、学年が上がってだんだんはづかしくなり、最近では手を上げて道を渡ることが少なくなってきた。

それに、いつも家族で車で出掛ける時、横断歩道が近づくと、

「歩行者がいるよ。」

と遠くに見える歩行者に気づいた母が父に知らせている。それはなぜかと聞いたなら、横断歩道付近に歩行者がいる場合は、必ず車は一時停止をしなければならぬ交通ルールなのだと教えてくれた。だから、歩行者の私が待っていたら、車が気づいて止まってくれるだろうと思っていた。

そこで私は、横断歩道の渡り方について調べてみた。すると、長野県は横断歩道の一時停止率が一位だということが分かった。長野県では、歩行者が横断歩道を渡り終えた後に「ありがとう」の気持ちをこめて、お辞儀をする習慣があることを知った。それで、運転する人も「次も止まろう」という思いやりの気持ちに繋がりが、横断歩道の一時停止率の結果に出ているのではないかと言われている。

また、手を上げて渡ることは、小さな子供が目立つためだけではなく「横断歩道を渡りたいです」と明確な意思表示のために、子供だけでなく大人も手を上げて、ハンドサインを出すことが大事だということを知った。

横断歩道で車が止まってくれなかったのは、私にも原因があったのだ。それは、交通ルールだから車が止まっ

てくれるのは当たり前ではなく、歩行者の私もちゃんと意思表示をする必要があるということだ。そして、歩行者も運転する人も互いに目と目でコミュニケーションをとることで、より安全に渡ることができるのだ。それから、渡り終えた後に感謝の気持ちを伝えることで、次の「どうぞ」の思いやりに繋がっていくのだと思う。

交通安全は、人と人とのコミュニケーションによって、悲しい事故を減らすことができるのではないだろうか。交通ルールやマナーを正しく理解し、コミュニケーションをとろうとする私の心がけで、事故を防ぐことができるのだ。だから、これから横断歩道では、手を上げて、目と目でコミュニケーションをとり「止まってくれてありがとう」と感謝の気持ちを忘れずに伝えたい。

審査を終えて

NPO 法人日本こどもの安全教育総合研究所理事長 宮田 美恵子

小学生の部

令和六（二〇二四）年十一月に改正道路交通法が施行され、自転車運転中にスマートフォンなどを使用する「ながら運転」への罰則が強化されました。また、前年には「すべての自転車利用者に対する乗車用ヘルメット着用努力義務」も施行されています。

これらは、発達途上にある子どもたちが自らを守ることにつながる重要な改正です。

この交通安全ファミリー作文コンクールの意義は、子ども自身が交通空間での出来事を振り返り、あらためて考えてみることにあります。さらに書くことを通して、考えが行動化されることを期待しています。

開始以来四十六年となる今年、小学生の部は全国から千二百五十三点の応募があり、予備審査と本審査によって次の各賞を決定いたしました。

最優秀作（内閣総理大臣賞） 小学生の部から一点

優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞） 小学生の部各学年から一点以内

優秀作（文部科学大臣賞） 小学生の部から一点以内

佳作（警察庁交通局長賞） 小学生の部各学年から三点以内

表彰作品および講評は次のとおりです。

最優秀作（内閣総理大臣賞）は、千葉県の子供 永野太鳳さんの「つながれわたしのありがとう」が受賞し

ました。横断時に止まってくれた運転手にお礼をしなくなってしまった筆者は、お母さんとの会話でお礼には力があり、つながっていくと気づきました。心の変化がいきいきと述べられている点が高く評価されました。

次に、優秀作（文部科学大臣賞）は、熊本県の二年生 酒井宗佑さんの「ぼくのおうだんほどのわたり方」が受賞しました。いつか白杖を持って一人で歩いてみたいという前向きな意欲を持っている筆者に、読む側も勇気づけられる作品です。

優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）の一つ目が、千葉県一年生 松隈唯さんの「うんてんちゅうのスマホ」です。お母さんが事故に遭ったことを振り返り、スマホ運転の危険性と防止を強く訴えています。交通安全に対する切実な願いが伝わる作品として評価されました。

同じく優秀作を受賞したのが、福井県二年生 横山凌央さんの「気もちのちがいがじこのもと」です。お母さんから、危険な運転をする自転車の中学生に遭遇したことを聞きました。体験談を聞いて事故原因を深く考えている点が印象的な作品です。

続いては、香川県三年生 松本栞奈さんの「安心してくらせるまちへ」です。小学一年生の時に事故に遭ってしまい、今も心と体の傷が癒えない筆者。自分のように事故に遭う人が一人でも減るように、という強い思いが伝わってくる作品です。

長崎県四年生 大木梨音さんの「わが家のルール」も優秀作を受賞しました。筆者は家族と話し合って決めた四つの約束を実行しています。筆者の交通安全に対して誠実に向き合っている様子が見て取れる点が高く評価されました。

続いては、愛媛県五年生 藤渕悠玄さんの「命の重み」です。筆者家族は、家族旅行の帰路、対向車線の車と自転車による事故を目撃しました。衝撃的な体験を経て、交通事故がなくなること強く訴える印象的な作品として評価されました。

最後に、福井県六年生 小藤終磨さんの「命を守るヘルメット」です。子どもの頃に交通事故に遭ってしまったおじさんがいる筆者は、自転車乗車時にはヘルメットを着用しています。交通安全の大切さを伝える優れた作品として評価されました。

佳作（警察庁交通局長賞）

佳作の一つ目は、鹿児島県一年生 有村綜真さんの「おうだんはどう」です。筆者は登下校に慣れてきたところにヒヤッとする体験をします。登下校に慣れてきた今こそ気を付けたいと、安全意識の高まりが描かれている作品として評価されました。

大分県一年生 竹山明里さんの「てをあげておうだんはどうをわたります」も佳作を受賞しました。筆者は交通事故で亡くなった会ったことのない兄について心の内を正直に表現しています。安全運転への強い願いが伝わる作品として評価されました。

茨城県一年生 谷古宇楓さんの「てをつなごう」も佳作を受賞しました。道だけでなく、駐車場でも車の動きに注意しないと危ないことを知った筆者。弟を守るお兄ちゃんの頼もしさが伝わってくる作品として評価されました。

兵庫県二年生 鷹取遵さんの「ぜったいにわたれないおうだん歩道」も佳作を受賞しました。筆者はある日、使わない約束の横断歩道を使ってしまう。家族を悲しませないために約束を守るべきだったという気づきが鮮明に伝わってくる作品です。

福井県二年生 瀧口理紗子さんの『とび出しちゅうい』気をつけても佳作を受賞しました。筆者のおじいちゃんの家の前には、走っている男の子の看板があります。さまざまな看板に注意を向け、安全意識を高めていく様子が評価されました。

徳島県三年生 倉田はるさんの「自てん車で出かけたい」も佳作を受賞しました。子どもだけで自転車で出か

けるために気を付けることを家族と一緒に実践的に学び、常に安全に気を配ることを心に決める様子がよく伝わってくる作品です。

茨城県三年生 柴颯翔さんの『「死角」がある」と知った日』も佳作を受賞しました。お母さんに言われて車の運転席に座った筆者は、「死角」がどんなものかを知りました。実験を通して確認の大切さに気づいた点が印象的な作品としても評価されました。

大阪府四年生 岩丸琴葉さんの「あなたは被っていますか？」も佳作を受賞しました。ある日、自転車ではめけがをしたことをきっかけに、ヘルメット着用の大切さを実感した筆者。意識が大きく変わっていく様子が描かれた作品として評価されました。

兵庫県四年生 立花樹さんの「街の工夫とぼくができること」も佳作を受賞しました。色覚に少し異常がある筆者は、街の中の交通安全のための工夫に気づきました。安全のための工夫と使う人の関係が描かれている点が素晴らしいと評価を得た作品です。

茨城県四年生 古谷優月さんの「わたしのお姉ちゃんのはん長さん」も佳作を受賞しました。筆者は登校班の班長であるお姉ちゃんを尊敬しています。お姉ちゃんのように交通安全のために積極的に行動しようとする姿が描かれている点が評価されました。

福島県五年生 阿部楓さんの「事故で失うもの」も佳作を受賞しました。おじいちゃんが事故に遭ったことをきっかけに、相手の気持ちを思いやらなければ事故は防げないと筆者は述べています。ルールを守ることの大切さを訴える点が評価されました。

兵庫県五年生 川内咲弥さんの「歩行者優先！」も佳作を受賞しました。筆者は「歩行者優先」について自由研究を行いました。安全なまちにしたいという筆者の行動力と願いが伝わってくる作品として評価されました。山口県五年生 宮崎祐奈さんの「右よし、左よし、心の準備よし」も佳作を受賞しました。筆者は交通ルール

を守ると同時に気持ちにゆとりを持ち、安全に気をつけることの大切さを述べています。知識を培っていく様子も伝わる作品として評価されました。

徳島県六年生 曾我部大和さんの「自分たちの事故から学んだこと」も佳作を受賞しました。自分と姉が事故に遭遇した経験から、交通ルールを守る意欲を述べています。加害者・被害者の両側から交通安全に対する理解を深めた作品として評価されました。

愛知県六年生 中嶋結衣さんの「いつしゅんの出来事」も佳作を受賞しました。おばあちゃんの車に乗っている最中に予期せぬ交通事故に遭った筆者。心の動きがリアルに描写されており、交通ルールを守るという決意が強く表れている作品です。

岐阜県六年生 西濱千紘さんの「横断歩道でコミュニケーション」も佳作を受賞しました。道を渡る際に手上げるのは、意思を明確に示すためだと知った筆者。ルールを守り思いやることで、安全に道路を横断できることが描かれている点が評価されました。

今回ご紹介した受賞作からは、実体験や身近な人のエピソードを基に、子どもたちなりに交通安全に対して真剣に考えてくれていることがわかり、心強く感じます。

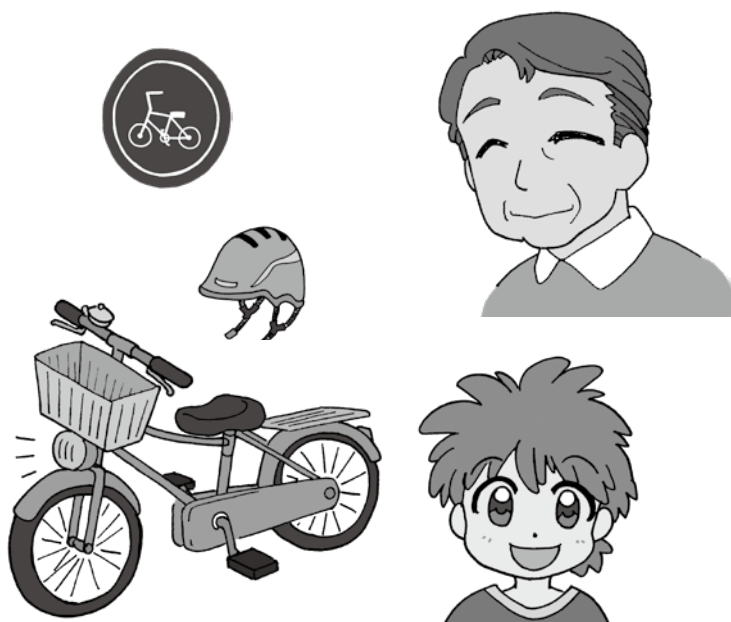
最後になりましたが、多数の応募作品を読んでいただいた予備審査員の方々、事務局の方々、関係者の方々、また、本審査会において、真正で厳正な審査を行ってくださいました審査員の方々には大変お世話になりました。心よりお礼を申し上げます。

令和6年度交通安全ファミリー作文コンクール審査員 ー 小学生の部 ー

(敬称略、順不同)

宮田美恵子	NPO 法人日本こどもの安全教育総合研究所理事長
羽 藤 雄 次	足立区子どもの安全安心プロジェクトチームリーダー
井口美由紀	全国公立小・中学校女性校長会会長
入 谷 誠	一般財団法人全日本交通安全協会専務理事
幸 田 徳 之	一般財団法人日本交通安全教育普及協会専務理事
児 玉 克 敏	内閣府政策統括官（共生・共助担当）付参事官（交通安全対策担当）
中 園 和 貴	文部科学省総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課長
今 井 宗 雄	警察庁交通局交通企画課長

中学生の部



最優秀作 内閣総理大臣賞

広島県福山市立城北中学校

命を守るヘルメット

三年 新田 咲

僕は、中学校に入学し、自転車で通学しています。学校推奨の白いヘルメットを購入しました。ある朝登校時、ヘルメットをかぶりあごの下でカチッと音がするのを見ていた母が、「おじいちゃんを思い出すわー。」と言います。四年前に亡くなった祖父の事です。祖父は、家から近くの鉄工所に勤めていて、そこまではバイク（昔のスーパーカブ）で通勤していたらしいです。深緑のヘルメットにあごヒモの所をいつもきっちりしめて行っていたのが、とても印象的だったらしいです。近所の方々にも、安全運転は有名で、挨拶をよくしてくれる元氣な人だったらしいです。……らしいというのは、僕が生まれる九年も前に交通事故にあい、

車椅子生活になったからです。だから、僕は祖父の元氣な安全運転のバイクの姿を見た事ありません。それをとても残念に思いますが、母と祖母は、「生きてくれただけで良かった。ヘルメットのおかげなんよ。」と教えてくれました。事故については、いつものように祖父がバイクで通勤していて、交差点の青信号を直進していたら、暴走し右折して来た対向車に、はねられた形になったそうです。祖父は、バイクごと横転し、道路に投げ出され、縁石で頭を強打し、縁石にべっとり赤い血がついていてひどい事故だと分かったと祖母が言っていました。けれど、ヘルメットをきちんとかぶっていた祖父は、頭は強打したけれど、ヘルメットに守られて、骨折は頭も身体もしていても、幸い記憶力や言語力は守られていたそうです。だから、事故から、二十年、身体に障害は残ったけれど、生きてくれたので、僕達とも会う事が出来ました。事故当初は、母と祖母は相手への恨みや憎しみに苦しんだそうですが、（消える事はありませんが）その気持ちを祖父が回復するように応援する事だけに注ぐように切り換え痛みを耐え、リハビリを頑張る前向きな祖父の事だけ考えたそうです。一生寝たきりと言われていた所から、車椅子で生活出来るまで

回復し、母も祖母も、祖父が生きてくれている事が本当に支えになったようです。

その反面、祖父が昔のように元気だったら、一緒に歩いたり、走ったり、買い物に出かけたり……。ほんの普通の日常が過ごせていたのに……。ただ普通の日常を送りたかった……。と祖母が残念そうによく言っていました。

事故は、幸せな日常を壊します。ほんの少しのルールを守らない人がいたら、相手の人生もその家族の人生もまわりも変えてしまうかもしれません。その大変さを僕は、身近な人の辛い思いや経験で知っています。僕はまだ車の運転は出来ないけれど、将来車の免許を取ったら、正しく交通ルールを守って運転すると決めています。今は、毎朝あごの下で、カチツと音がするよう、きちんとヘルメットをかぶり交通ルールを守って自転車を運転する事を続けていこうと思っています。



優秀作

国務大臣・国家公安委員会委員長賞

香川県高松市立山田中学校

一年 片山 ほのか^{かたやま}

大切な家族の命を守るために

中学校に入学して、毎日自転車に乗るようになり、まだ事故に遭ったことはないが、雨の日に滑って転倒するなど何度か危ない思いをしたことがある。

そこで、今後事故に遭わないようにするために、また、私以外の家族が自転車や自動車で事故に遭わないために、交通安全について家族と話し合うことにした。

私の父は警察官なので、これまでに仕事で遭遇した事故について聞いてみた。父によると、交番勤務の時に様々な事故処理を取り扱ったとのこと、共通していえることは、事故には必ず原因があり、どちらかが交通違反をしたか、マナーを守っていないことが多いと教えてくれ

た。私も自転車通学に慣れてきたことで、「これくらいいいかな。」とルールを守らないといけないという気持ちが緩んでいることに気がついた。この気持ちの緩みが事故へと繋がるのだ。

もう一つ父が教えてくれたのは、単独事故以外は相手がいる交通事故で、その場合、自分の家族だけでなく、相手の家族も同じように辛い思いをするということだ。交通事故は殺人事件のように自分の意思で犯すものではなく、ふとした気の緩みから起きてしまう。わざとではないにしても事故の原因を作った方も、それが原因で事故に遭遇してしまった方も様々な悲しみや苦しみを抱えることになるだろう。私たち家族もどちら側にもならないために何が大切なのか話し合った。

まず、車や自転車に関係なく、出かける時は時間に余裕を持ってゆったりとした気持ちで運転することが大切である。全国的にみても、香川県は交通マナーが悪いことで有名で、毎年、交通事故死者数が多い。気持ちに余裕があり、譲り合いの心が持てれば、確実に事故は減るのではないかと思う。私はよく、時間ギリギリで家を出ることがあるので、これから、五分行動を意識して

いきたい。

次に大切なことは、自転車でも、事故を起こせば死亡事故につながることもあると認識し、自覚を持って自転車に乗ることである。まずは、ヘルメットを被ること、携帯電話を使ったりイヤフォンをしたりするなど、ながら運転をしないことを守って自分の身を守り、さらに、スピードを出しすぎないこと、飛び出さないこと、譲り合うことを守って他人に怪我をさせないように気をつけなければならない。

家族と話合って気づいたことは、両親は私や兄のことをいつも心配して見守ってくれていたということだ。母は毎日、「気をつけていってらっしゃい。」と見送ってくれていたが、それは、元気に帰ってきてほしいと願っているからだそうだ。そんな両親を悲しませないためにも、交通事故を起こさないために大切なことをしっかりと守って、安全運転で自転車に乗りたと思う。

鳥取県米子市立淀江中学校

二年 長谷川 竣はせがわ しゅん

油断したその先は

あれは、私の初体験でした。今でも思い出すと、心がドキドキします。

当時中学一年生の私は、小学校で六年間歩いてきた通学路を横目に自転車で通える喜びを感じていました。自転車通学にも少しずつ慣れてきた六月、朝の八時ごろ、いつものように自転車をこいで、学校にむかっていた。その道は、小学生と中学生がすれ違う通りです。私は前をいく友達を追いかけているうちに、友達のスピードは速くどんどん小さくなっていきます。私は諦めて、向かってくる小学生の列を気にしながらいきました。小学生に当たらないように、慎重に進んでいきます。横断歩道で止まり赤から青になり、小学生の列が渡りきるまで待ちいよいよ進もうとしたその時です。ペダルを一、二、三と踏んだ瞬間、右側から小学生が笑顔で勢いよく走ってきました。気づいた時には、私の体は

ななめになり、自転車が倒れないよう、支えるのに精一杯でした。私は何が起ったのか分かりませんでした。しかし、泣き声とともに、自転車のカゴがへこんでいることに気づき、その瞬間やつてしまった、と思いました。と同時に、私は何をしたら良いのかわからず泣いている小学生のそばで声をかけることに必死でした。ランドセルで小学校一年生であることに気づきました。私と同じで学校に慣れ始めた楽しい時期だとわかり、楽しい通学路を私が恐怖体験にさせてしまったと感じました。学校のチャイムが鳴り周りにいた小学生から、

「大丈夫です、さきに行ってください。」

と、言われその優しさに甘えましたがその反面ひき逃げ犯と同じではないか不安でした。

学校の先生に報告し、先生から言われた、「大丈夫か」の言葉に救われました。その日の内に小学生の保護者にも謝罪をし家族とも乗り方について話をしました。その時に自転車は、車と同じく車両なので特に気をつけないといけないということを学びました。

しかし私にとって辛い一週間が始まりました。あの事故からは、いつも以上にスピードをおとし、小学生の列

とすれ違う時には歩いた方が速いくらいの速度で進めていくようにしました。しかし、知らない小学生たちが私に指を差して、

「あの人つてあれだよね。」

などとうわさが広がってしまったのです。それが何日も続きました。登校している時に小学生とすれ違うと視線を感じ、日に日に指を差す人の数が増えていきました。本当に私だけが悪かったのだろうかとつらく、苦しかったです。でも、学校の先生たちに相談をし、対応をしてもらったおかげで以前のように通学ができるようになりました。

学校で交通指導があり警察の方より、改めて、歩行者からみたら自転車は車と同じであり、問題が起きてからでは遅いと指導がありました。私は、あの時を振り返ると相手が小さい一年生だった為、目線にはいっていなかったことを、思い出しました。もしスピードが出ていたらと思うとゾッとします。左右の確認の大切さ、歩行者優先、慣れた環境だからその油断に気をつけて、時間と心に余裕をもって行動をするように心がけています。

三年 岩佐 葵

誰もが交通社会の一員

ぶつかる！咄嗟に両手でブレーキを思い切り握った。少し後輪が滑ったが、無事に止まることができた。しかし、自動車との距離はわずか三十cmほどしかなく、前かごに入っていたお弁当袋ははずみで飛び出してしまった。脇の下を汗がつたっていく感覚がした。これが冷や汗をかくということか。

学校までの通学路。自転車に乗ることがそれほど得意でもない私は、ゆっくりとペダルをこいでいた。自転車通学の高校生にどんどん抜かされる。しかし、焦ってスピードを出しては危ないと、自転車にしてはスローな走行だった。途中の信号の無い交差点で一台の車が合流しようとしていた。私が走行していた車線が優先道路だったため、迷いなくペダルをこぎ続けた。だが、車の前を通り過ぎようとした瞬間、車が前進してきた。慌てた私は、急ブレーキをかけた。これが冒頭のシーンである。

自動車も急ブレーキをかけたのだろう。自動車を運転していた人は大慌てで車から降り、私のお弁当袋を拾いながら駆け寄ってきてくれた。怪我はないか、自転車は壊れていないか、などを聞いてくれた後、怖い思いをさせて申し訳なかったと謝ってくれた。そして、私の横を走行していた自動車が自分に譲ってくれたため迷惑にならないように急いで合流しようとしたこと、自転車も止まるだろうと思い込んだことが今回の原因だったと何度も頭を下げていた。

帰宅後、このことを家族に話した。私は自分に全く非がないと思っていたため擁護の言葉を待っていたが、両親と姉からはそれぞれ異なった視点から注意を受けた。自動車を毎日のように運転する両親からは「自動車の運転手の思い込みや注意不足が原因ではあるが、自転車側も自動車が出てくるかもしれないと考えて止まることができるようにしておかなければいけない」と指摘を受けた。私と同じ自転車通学だった姉からは「自転車のスピードが遅いから止まると勘違いされたのかもしれない。それに、もし飛び出してきたのが自動車じゃなくて歩行者だったら、加害者になっていたかもしれないよ」と注意

優秀作

文部科学大臣賞

された。交通ルールを守っているつもりだったが、危険予測を怠り、交通事故にあうかもしれないなかつたことに気がついた。

交通ルールを守っていても交通事故を起こしてしまう、巻き込まれてしまう可能性がある。加害者だけでなく被害者にもならないようにするためにはどうすればいいのか。このことについても家族で話し合った。出した結論が「自動車、自転車、歩行者などの立場に自分を置いて交通ルールを厳守し、常に注意を怠らないこと」だった。あの時、私は自分のことしか考えていなかったのではないだろうか。優先道路という交通ルールだけを妄信し、自動車が自分をどう認識しているのか想像していなかったのではないか。歩行者が飛び出してくるかもしれないという注意が足りなかったのではないか。改めて自分の視野の狭さを痛感し、反省した。これからは、交通社会の一員であることを自覚し、交通ルールを守るだけでなくさまざまな立場から危険予測をすることを常に心がけていきたい。この意識が広がり交通事故が減っていくことを願い、今日も自転車で学校に行く。

愛媛県松山市立南中学校

思いやりの注意

二年 片桐^{かたぎり} 麻帆^{まほ}

私は、習い事等で、よく母の運転する車で送迎してもらいます。ほぼ毎日のことなので、その道中、様々な場面に出くわしたり、交通ルールを明らかに無視している人も見かけます。

雨がザーザー降っている日に、傘を片手でさしながら、自転車を片手運転している人。車より自転車が優先とは言え、出会い頭に一回も停止せず躊躇なく飛び出してくる自転車。そしてよく見かけるのが、イヤフォンを耳に付け、スマートフォンに夢中になりながら歩いていて、全く周りの状況が把握できておらず、車が近づいていることにも気付かず、車が追い越す時によりやく気付き、

驚いている人。

もし運が悪かったら、事故になりかねない状況でした。けれど、事故にはなっていないません。それはなぜかという、片方が未然に防ぐ行動をとれているからです。

だいたいの事故が起こる原因は、双方の不注意が重なってしまった時だと思います。

母は、運転中、危険な場面に直面すると、いつも私に言っていることがあります。

「相手側の注意もこちらがしてあげる気持ちでいてね。」

「相手の不注意もこちらがカバーするように。」

そうやって危険な状況でも注意不足を補ってあげれば、何も起こらず済むのだと教えてもらいました。

私は、交通安全とは、自分自身がルールをきちんと守り、それを行動で表すことで安全が確保できると思っていますが、それだけでは、安全は守られないと気付きました。

特に、まだ幼い子供や、高齢者の多くは、ルールを理解していなかったり、注意力が低下している可能性が高いので、こちら側が配慮し、周りがサポートしなければならぬと思います。

最近、自転車の交通違反に反則金を納付させる、いわ

ゆる「青切符」による取締りの導入を盛り込んだ改正道路交通法が二〇二四年五月十七日、可決・成立しました。信号無視や携帯電話を使用しながらの運転などが対象となり、二年以内に施行されるそうです。

私は今まで、あまり自転車を乗らず過ごしてきたのですが、高校生になると、自転車通学が始まります。新たに改正されたルールどころか、今までのにあった自転車の交通ルールも知らないことがたくさんありました。

自転車通学が始まれば、朝はバタバタしてしまったり、睡眠不足の日だったり、その日その日のコンディションも違うので、毎日のように自転車を利用するようになる私達は、より安全に意識を高めていかなければならないと思います。

もちろん、それぞれ一人一人が交通安全の意識を持って行動することが一番大事ですが、少し心に余裕を持って、ゆずり合ったり相手を思いやる行動も、町全体の交通安全につながると思います。

独りよがりの交通安全ではなく、皆がその日道で出逢った相手のことを思いやれる、そんな社会になればいいと思います。

佳作

警察庁交通局長賞

兵庫県神戸市立白川台中学校

一年 庄司 礎

もしあの時ヘルメットがなかったら……

僕の高校生の兄は、毎朝最寄り駅まで自転車で通学しています。兄は朝にせっかくセットした髪型が崩れるにもかかわらず、しっかりとヘルメットを着用して自転車に乗っていきます。僕の家の中は坂道が多く、急な坂道もあるので、自転車のスピードが出やすいため、とても慎重な兄は安全運転を心がけ、周囲をよく見て自転車に乗っているそうです。

ある朝、いつものように兄が自転車に乗って通学していると突然、前輪が回らなくなり前輪を軸にして後輪が浮き上がり、乗っている自転車ごと前転してしまいました。

リュックに入りきらなかった荷物をエコバッグに入れ

てハンドルにかけていたので、そのエコバッグが前輪に巻き込まれたことが原因でした。

兄はハンドルを握ったまま前転し頭から地面に落ちてしまいました。

兄がかぶっていたヘルメットは傷だらけになり、また顔を打っていたため鼻血が止まらず、顔や手の甲も傷だらけ、リュックに入っていたパソコンもへし曲がり、自転車も壊れてしまいました。

連絡を受けた母がすぐに駆けつけ病院に連れていき、先生に体中のレントゲンを撮ってもらったそうです。幸い骨折はなく打撲と首の捻挫や擦り傷だけで済みました。それでも痛みが酷く、痛みがひくまで一カ月くらいかかったそうです。

今回は他に通行人や車も通っていませんでしたので兄一人のケガだけで済みましたが、もし歩行者を巻き込んでしまっていたり、後ろから来た車にはねられたりして、もっと大きな事故につながっていたかもしれないと思うと僕はぞっとしました。

兄は自転車に乗って通学するとき、事故をした場所を通ると、今でもあの事故のことを思い出して怖くなるそ

うです。母も家族が家を出たあとに電話が鳴るとドキッとするように言ったと言っていました。

もし兄がヘルメットを着用していなかったら……と思うと僕も本当に怖くなります。兄は頭を強打して死んでしまったかもしれません。物は壊れてもまたお金を貯めて買うことができるけれど、命はそうはいかないと命の大切さを改めて感じました。

僕も高校生になったら自転車通学するかもしれないので、ハンドルに物をかけない、また自転車に乗るときはマフラーやコートなどタイヤに巻き込まれないような服装を考えて乗ることも大事だと思いました。

さらに、自転車に乗るということは加害者にもなるかもしれないということをしつかりと頭に入れて乗らなければなりません。

今回の兄の事故を教訓に僕も交通ルールをしつかりと守り、事故を起こさないように気を付けて過ごそうと思います。

そして今の僕にできることがもう一つあります。それは、身近に起きたこの事故で感じたことや怖かったことを人に伝えることです。ただ怖かっただけで終わらせるのではな

く、ヘルメットの大切さ、家族も感じた恐怖、命の大事さをしっかりと友だちにも伝えていきたいです。

富山県富山市立水橋中学校

一年 廣野ひろの琥太郎こたろう

思いやりをつくる交通安全

僕は、夏休みに「交通安全」について、家族で話し合いました。家族一人一人が気を付けていること、通学路の危険箇所について話し合ったことを紹介します。

まず、僕自身が気を付けていることは、交差点では、左右の安全を確かめてから横断していること、歩くときは右側通行をし、前方から車が来たら、一旦停止をすることです。

小学生の弟は、三年生になり、道路で自転車に乗るようになってきました。弟が気を付けていることは、スピードを出さないようにすること、目と耳で安全を確かめることです。

父は、普段から車を運転する機会が多いので、道路を全体的に見て運転しています。高齢者や初心者が運転している車が前を走っていたら、いつも以上に車間距離に気を配っています。また、高齢者が自転車に乗っているのが見えたら、突然転倒することがあるかもしれないので、より慎重に運転しています。さらに、雨の日は滑りやすいため、晴れている日よりも慎重に運転しています。他にも、高速道路等を長時間運転するときは適度に休憩を入れながら運転するなど、天候や状況に応じて臨機応変に運転しています。車の運転をするということは、注意すべきことがたくさんあるということを知りました。

母は、小中学生の登下校の時間帯に車に乗るときは、突然子供が飛び出してくるかもしれないので、より注意しています。また、僕たちが登校するときは、できる限り玄関先で顔を見て、笑顔で「いつてらっしゃい、気を付けてね」と声をかけるようにしています。心の状態が歩き方にも表れると思うので、安全に登校し、安全に帰ってくるように気持ちを込めて言うそうです。

通学路については、危険箇所を確認し、実践していることを確認しました。用水路の近くは道幅が狭く、車が

通過すると落ちてしまう危険性があるため、周りに車がないか確認しながら通る必要があります。学校の近くの交差点は、車道と歩道を隔てるブロックがなく危ないため、なるべく車道から離れたところを歩くように心がけています。幼稚園の前は、送迎で車の出入りが多く、急いでいる人もいるため、特に注意して、手を挙げて自分の存在を知ってもらうようにしています。

今回、通学路には危険なところがたくさんあることを改めて確認し、弟にも気を付けるように話をすることができました。また、母が笑顔で送り出してくれる理由を知って、心が温かくなり、嬉しくなりました。僕もこれまで以上に笑顔で「行ってきます」を言いたいと思います。「交通安全」と「思いやり」はつながっているのだと思いました。

これからも通学路の危ない所を見つけたときは、家族や周りの人に伝えて、事故にあわないように気を付けたと思います。

群馬県前橋市立箱田中学校

一年 安原 思惟
やすはら しゆい

姉の自転車通学と交通安全

私の家族は、群馬県の静かな町に住んでいます。家族は四人で、お父さん、お母さん、高校二年生の姉、そして私、中学一年生です。

毎日、姉は自転車で学校に通っていますが、私は歩いて学校に行っています。

最近、姉が学校から帰ってきて、「今日、車にぶつかりそうになった。」と話してくれました。姉が自転車で通学路を走っていた時、急に車が曲がってきて、危うく事故になりそうだったそうです。私はその話を聞いてとても驚き、そして怖くなりました。姉が無事で本当に良かったと安心したもの、もし事故が起これていたらと考えると、とても不安になりました。

それから私は、姉が自転車通学することについて、もつと真剣に考えるようになりました。どうすれば姉が安全に通学できるのか、一緒に話し合おうと思いました。

まず、姉に夜道を走るときには反射材をつけることを提案しました。姉は「そんなに心配しなくてもいいよ。」と笑っていましたが、私はどうしても心配でした。夜道は暗くて、車から見えにくいので、少しでも安全にするためには、反射材が役立つと考えました。

次に、姉と一緒に通学路を見直しました。今まで姉が通っていた道は車が多く、狭い道でした。そこで、少し遠回りでも、車が少なくて広い道を選ぶことを提案しました。

新しい通学路を姉と一緒に自転車で行ってみると、前よりも時間は少しかかるけれど、車とすれ違うことが少なくて、安心感がありました。

お父さんとお母さんにも、姉が危険な目にあつたことを話しました。お父さんは車から見た夜の自転車の見にくさを話してくれました。お母さんは自転車から見た車の危険度について話してくれました。

家族全員で話し合うことによって、交通安全を見直すことも、とても重要なことなのだと感じました。

私はまだ中学一年生ですが、今後は私も自転車通学をすることになるかもしれません。その時は、今回姉と一緒に学んだことを忘れずに、自分の安全を守りたいと思います。

最後に、交通安全は、私たち全員が考えるべき大切なことだと思います。事故はいつでもどこでも起こる可能性がありますが、私たちが気をつけることで、それを防ぐことができるはずです。これからも家族と一緒に安全に過ごせるように、交通安全についてしっかり考えていきたいです。

東京都共立女子中学校

二年 阿部 帆夏
あべ ほのか

とみもまた

「とみもまた」これが我が家の交通ルールだ。

私は交通事故と聞くと歩行者が赤信号で横断して車にはねられるというイメージがあった。しかし五年前そのイメージを大きく変えた出来事があった。池袋暴走事故だ。青信号を渡っていた母親と子供が高齢ドライバーが運転する車にはねられた。ドライバーはアクセルとブレーキを踏み間違えたそうだ。私はこのニュースを見た

とき可哀想と強く思った。二人を生き返らせてあげて欲しいと何度願ったか分からない。高齢者は車の運転をするべきではないとも思った。しかしそう思っても二人が亡くなった事実は変わらない。日本から高齢ドライバーをゼロにすることはできない。ドライバーが変わらないのなら歩行者が変わるしかない。青信号でも車が突っ込んでくる今日。自分の身の安全を守るためにはどのような対策が必要なのだろうか。家族で話し合い一つの結論に達した。それが「とみもまた」である。

「とみもまた」は「止まる、見る、もしかして、待つ、確かめる」の五つの行動を指す。「止まれ」の標識がある場所ではもちろんだが標識や信号がない場所でも一時停止する。青信号でも左右、前後が安全かどうかを見る。もしかして自動車、バイク、自転車などが来るかもしれないという意識を持つ。心や時間にゆとりを持ち安全が確認できるまで車が通過するのを待つ。安全に横断、通行ができるかどうかを一度だけではなく二度確かめる。中でも私が特に意識していることは「待つ」だ。時間に余裕がないと車が少し遠くに見えていても走って渡ってしまう。信号が点滅していても渡ってしまう。周囲を確

千葉県柏市立柏中学校

二年 小柏おがしわ 奈帆なほこ子

安全へ繋ぐささやかな敬意

認せず信号だけ見て渡ってしまう。だから私は目的地に到着する時間から逆算して時間にゆとりを持って外出することを心がけている。これを実行してからは信号が点滅していたら次の青信号で渡ろうと自然に思えるようになった。青信号でも周囲を確認してから渡れるようになった。

交通事故の大半はドライバー側に責任があると思う。だがドライバーに責任を押し付けても失われた命や能力は二度と戻って来ない。自分は交通ルールを守っているから大丈夫。そう思っている人もルールを無視した車が突っ込んでくることもある。事実日本では毎日のように交通事故が起こっているのだから。自分の身を自分で守るにはどうすればいいのか。その答えの一つが「とみもまた」を実行することだと思う。自分が交通ルールを守るのは当たり前。それにプラスして周囲の状況を把握するのだ。

「とみもまた」が「おかしもち」のように日本中に広まってほしい。そうすれば涙を流す人が少しでも減少すると思うから。

運転席の母が、すまなそうな顔を見せる。

「そんなに気を遣ってくれなくても……」

と苦笑しながら、こちらに深々とお辞儀をしている小学生達に向けて、ぺこっと軽く頭を下げると、気分よさそうに先へ向けて再び車を発進させる。それは私がかつて暮らした町で、何度も心に刻んだ光景だ。信号機のない横断歩道の前で、気付いた車が停まってくれると、まずは一礼してから急ぎ足でそこを渡りきり、さらに振り返って「ありがとうございます」と挨拶をする子も稀ではない。そんな律儀な子ども達だからこそ、見守る大人達も温かく、歩行者の姿を逃さず停車するドライバーが多く見受けられた。豪雪で知られる山形・米沢の、人情味あふれる土地柄の表れだった。

所変わって、今の街はどうか。私は四年前に、東北暮らしからまた元の住まいに戻って来た。何でも揃って便

利な、程良い都会と感じるこの生活は、時に雪国恋しさを抱きつつも、結構気に入っている。四季を通じて特に不自由はなく続く日常はありがたい。しかし一つ、私にはどうしても受容しがいこの街の常態がある。それは、我が物顔で車の前を渡ってゆく歩行者達の姿だ。特に私の住む地域は大きな団地やマンションが建ち並び、子供の数も多い。だから行き交う車も歩行者も、互いにルールやマナーの遵守がより求められるところだ。しかしながら、私が一歩行者として、或いは車の同乗者として日頃察するかぎり、運転者を顧みない横柄な歩行者の振る舞いが、恒常化してしまっているのだ。

確かに、横断歩道は歩行者優先だから、ドライバーには一時停止して先を譲る義務がある。一方の歩行者は、その歩みを急がねばといういわれなどはなく、悠然と横断しても全く問題はない。ただ、より安全な交通を形づくる要として、やはり人の「心」があるのではないだろうか。JAFが行った二〇一三年の調査結果によれば、「信号機のない横断歩道における車の一時停止率」において、千葉県は三一・九%で、下から数えて十一位。対して東北六県の平均は五十%を超えている。私はその数

値を知った時、まさに自身の経験と重ね合わせて、大いに納得してしまった。

ゆったりした地方とは交通環境が異なる都会の人々に、一様に礼儀正しい歩行者像を求めるわけではない。けれども、忙しい往来の中にあっても、少しでも相手の背景を想像するゆとりが持てれば、独りよがりではなく、ちよつとした気遣いが見える行動に繋がっていくのではないだろうか。停車した目の前を、無遠慮にちんたら横断されては、思わず舌打ちも出てしまいそうだが、軽い会釈でもよい、歩行者からの心が伝われば、いささか暗れやかな気持ちでハンドルを握ることができるようだ。だから私は、ほんの微力ではあるが、驕らぬ謙虚な歩行者であり続けたいと思う。

埼玉県新座市立新座中学校

三年 新井 広子
あら い ひろ こ

一人ひとりから始まるもの

「一瞬のことだった。」と父は言った。角から急に出てきた車、バイクのブレーキをかける父、気づいた時には反対車線の道路に倒れていた。私が生まれる前、父は仕事場へ向かう途中で事故に遭った。角から出てきた車は父が走っていることに気づかず、そのままの速度で運転し、父が乗っていたバイクと衝突してしまった。父は救急車で運ばれ、病院で治療してもらった。右足の膝を骨折していることが分かった。また、ガラスの破片で大怪我を負ってしまった。この事故の話聞いた時は驚きが大きかったが、今、思うとこの事故で父が生きていられたのはヘルメットやジャケットの正しい装着ができていたからだと思う。

父はいつもバイクや自転車に乗る時、ヘルメットを入念に確認している。頭のサイズに合っているか、あごひもカバーがちゃんとつけられているかなど母や私が自転

車に乗る時も「もうちょつときつくしないと落ちてきちゃうよ。」と教えてくれる。しかし私は、小さい頃、ヘルメットを被ることに抵抗があった。なぜなら、ヘルメットをピツタリに被ると汗をかいて頭全体が蒸し暑くなるからだ。だから「ヘルメットを被ろう。」と言われても「被りたくない。」と言っていた。それでも「怪我をする」と危ないから被りなさい。」と言われ、その父の強い意志が命を守ることに繋がったのだと思った。父はバイクに乗る時ヘルメット以外にも冬は「ジャケツトや厚めの服」を夏でも「長袖」を着ていた。衝撃を直で受けるよりかは何かクッションのようなものがあつた方が自分への被害を小さくできるという考えも自分の命を守ることに繋がつたのだと思う。

実際に警視庁が令和五年に公開した「二輪車の交通事故統計」によると二輪車乗車中の交通事故死者は全国で約二割、都内では約三割を占めており、自転車や四輪車よりも高い数値となっている。また、二〇一八から二〇二二年までの五年間で致命傷部位として割合が多かったのが頭部で約半分、次いで胸腹部が約三割となっていた。二〇二二年に起きた二輪車乗車中の死亡事故に

山口県下関市立木屋川中学校

三年 なかむら 中村 たすく 輔

決意の夏

おける約三割が頭からヘルメットが外れていた。これは、ヘルメットを正しく装着していなかったことが頭部に致命傷を負ってしまい死亡事故に繋がったと考えられる。私たちと事故は身近な存在だ。だからこそ、ヘルメットやジャケットを正しく装着して安全性を高めていくことが大切だと思う。

あの日、もし父がすっかりヘルメットとジャケットを装着していなかったら父も私も今はいなかったかもしれない。これからは父のように正しくヘルメットやジャケットを装着して、自分の命は自分で守れるようにしていきたい。また、正しい装着の仕方を沢山の人に発信していきたい。

一人ひとりから始まる交通安全の輪。一人ひとりの命も周りの人たちの命も守ることができるように。

祖父と叔父は交通事故で亡くなっている。祖父は昭和六十年の夏に、叔父は平成四年の夏に、それぞれ自動車運転による事故だった。

この八月、叔父の三十三回忌の法要があった。私は父から事故の様子を聞いた。叔父が運転免許を取得して初めての夏、友人を乗せて帰路に着く途中、運転を誤って道路から転落したらしい。同乗していた叔父の友人は、地元の方でよく知っている。毎年のように墓前に手を合わせにくてくれる。叔父も生きていてくれれば五十一歳になる。

自動車事故の原因は何か調べてみた。安全不確認、脇見運転、動静不注視、漫然運転、運転操作不適等、様々な原因があった。私はまだ自動車の運転をできる年齢ではないが、通学、習い事の行き帰りで毎日のように自転車に乗る。この自動車事故の原因は自転車にも同じこと

がいえるのではないだろうか。自動車でも、自転車でも、同じように運転には細心の注意を払わなければならない。自分は大丈夫という過信は、大きな事故を招くかもしれないと怖くなった。

家族で自動車や自転車での事故は他にもなかったか聞いてみた。父も母も高校生の時に自転車運転中に自動車との接触事故があったと聞いた。二人とも、幸いにも転倒だけで、大事には至らなかった。母は、ここから車が来るかもしれないと思いながら自転車を運転する必要がある、周りをよく見て予測することが大切だと言っていた。父は私に「KY活動」という言葉を教えてくれた。「危険予知活動」という意味だそう。建設会社に勤める父の業界では安全がとても重要なことらしい。安全に作業を進めるための重要な役割を果たすのがこの「KY活動」だそう。起こるかもしれない危険を予測する。私はそんなことはあまり考えずに自転車に乗っていた。いつ、どこで、どうやって事故が起きるかはわからない。でも、予測して防止することはできるはずだ。

祖母は夫と息子を交通事故で亡くし、少しでも交通事故がなくなればと、交通安全協会で通学路の安全を守る

ためにボランティアをしている。押しボタン式の横断歩道を通行する小中学生を、黄色のベストを着て、黄色の帽子を被り、黄色の旗を持って、登校を見守ってくれる。自動車が赤信号、歩行者が青信号になっているのに、猛スピードで通り抜けて行く自動車もいる。「おはよう。いつてらっしゃい。」と当たり前のように言ってくれるが、黄色の旗を伸ばしてくれることで事故を防ぐことができ、安心して横断できる。

身近な家族の体験を聞いて、改めて交通事故の恐ろしさを知った。今、安全に自転車に乗れることがありがたいと感謝するとともに未然に危険を予測すること、無茶な運転をしないことで、自分の身は自分で守らなければならないと痛感した夏となった。

審査を終えて

千葉大学名誉教授 鈴木 春男

中学生の部

よく知られているように、交通事故による死者数が一番多かった昭和四十五年に比べると現在の死者数はその六分の一以下になっています。これは官民が多方面から連携して取り組んでいる交通事故防止対策のすばらしい成果だと見るができます。しかし他方で、年間三千人近い方々が依然として悲惨な交通事故で亡くなっているという事実にも注目しなければなりません。そしてそうした悲惨な事故を無くすためには国民一人一人が自ら進んで交通安全を守ろうとする自発的な行動が不可欠です。

交通安全ファミリー作文コンクール「中学生の部」は、そうした自発的な交通安全行動を動機づける貴重な場である「家庭・学校・地域」の中で、重要な役割を演じてもらわなければならない中学生の意見が伝えられ、本人はもちろん多くの方々に交通安全の重要さに気付いてもらう機会を提供する大事な事業です。今回もそうした事業にご協力いただいたご本人はもちろん、ご父母、ご指導いただいた先生方、またそれぞれの学校ならびに関係者の方々に心からの感謝を申し上げます。

本年度、少し残念なのは、応募数が昨年より減少したことです。具体的には、本年度の応募総数は三千三百七点（中学一年生・千二百六十二点、二年生・千二百八十五点、三年生・七百六十点）で、前年度の四千八十九点（中学一年生・千八百三点、二年生・千三百十九点、三年生・九百三十六点、学年不明三十一）に比べて二割近く減っています。応募作品は、学校を通じて提出されるケースが多いのですが、中学生の間で

もネットで対話をする時代になり、長い文章を書く機会が少なくなっていることの反映かも知れません。しかし多くの中学生がどうしたら交通安全が守られるかを一生懸命考え、作文としてまとめることは、何よりも自分自身を交通安全に向けて動機づける結果となり、学校における交通安全教育の重要な施策となります。そのことをさらに多くの中学校に理解していただき、協力をお願いすることが重要だと考えています。

今回の審査では、その応募作品の中から、教職経験者や編集経験者、国語の免許取得者等六名の審査員による予備審査を経て、一次審査に中学一年生、二年生、三年生それぞれ十点ずつ計三十点が残され、それを本審査会（七名で構成）審査員が事前に評価して「審査評価集計表」としてまとめ、さらにその「審査評価集計表」をもとに審査員出席の審査会で厳正な審査・討議を重ねました。その結果、最優秀作（内閣総理大臣賞）一点、優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）各学年一点計三点、優秀作（文部科学大臣賞）一点、佳作（警察庁交通局長賞）七点が選ばれました。そして、最終的には最優秀作および優秀作は警察庁長官、佳作については警察庁交通局長により決定されました。

最優秀作（内閣総理大臣賞）は、広島県の中学三年生、新田暁さんの「命を守るヘルメット」でした。自転車通学をしている筆者がヘルメットを被る姿を見て、母が生前の祖父を思い出す導入の部分から入り、自動二輪車を安全運転していた祖父が心ないドライバーの右折により重傷を負いながら、ヘルメットのお陰で命は落とさずに済んだことに話が進みます。さらに事故にあうことの悲惨さにも触れながら、ヘルメット着用の重要性が構成の見事さも含めて展開されているすばらしい作品でした。

次に、優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）ですが、中学一年生からは香川県の片山ほのかさんの「大切な家族の命を守るために」が選ばれました。交通事故が起きないために何が必要かを家族皆で話し合う場面が丁寧に描かれており、特に警察官である父からの助言をもとに、マナーを守り、余裕をもって行動することの重要性、さらに自分自身のこととして自転車に乗る際に注意すべきことが述べられているよい作品でした。

中学二年生からは鳥取県の長谷川竣さんの「油断したその先は」が選ばれました。相手の小学一年生が無理やり横断してきたとは言え、自分が自転車で加害者になった体験を素直な文章で描いていて引き込まれる作品でした。しかも事故を起こした当事者としての噂が広まるという辛い立場も体験し、これからは絶対事故は起こすまいという決意が高まっていく姿がよく描かれていました。

中学三年生からは栃木県の岩佐葵さんの「誰もが交通社会の一員」が選ばれました。自分はルールを守って自転車に乗っていたのに、無理に合流してきた自動車にぶつけられそうになった体験から書き始め、それを自分は正しかったのにと家族に訴えたところ、相手の立場に自分を置いて注意を怠らないことが大事だと説得され、自分のことしか考えていなかったことを反省する点がよく描かれていました。

優秀作（文部科学大臣賞）には、愛媛県の中学二年生、片桐麻帆さんの「思いやりの注意」が選ばれました。交通安全は相手への思いやりの気持ちから達成されるということが、母の運転する車に同乗して体験した具体的な例をもとに示されていてすばらしいと思いました。本来は相手がなすべき注意を、こちらがしてあげて相手の不注意をカバーすることが大事という母の言葉の引用がとても生きていると感じました。

佳作（警察庁交通局長賞）には以下の七作品が選ばれました。兵庫県の中学一年生、庄司礎さんの「もしあの時ヘルメットがなかったら……」は、兄の自転車事故を通じて、ヘルメット着用の重要性が自身の気持ちとして示されている作品です。事故の状況が明確に描かれており、そこから自分自身もヘルメット着用はもとより、ハンドルにものをかけないことや、転倒しても安全な服装など、具体的提案がされているのもよいと思いました。

富山県の中学一年生、廣野琥太郎さんの「思いやりをつくる交通安全」は、家族それぞれが交通安全のために気をつけていることが具体的に述べられていて、交通安全を指摘した家族交流の姿が目につく作品です。また、危険箇所を家族で確認しあっている点もすばらしいし、思いやりが交通安全に結びつくという結論もすばらしいと感じました。

群馬県の中学一年生、安原思惟さんの「姉の自転車通学と交通安全」は、姉の自転車通学でのヒヤリ体験を材料に家族皆で話し合う温かい雰囲気を感じられる作品です。夜の自転車走行では反射材をつける提案や、通学路を姉と一緒に見直す体験なども描かれ、まさに交通安全は家庭からを実現しているよい作品でした。

東京都の中学二年生、阿部帆夏さんの「とみもまた」は、家族で交通安全のために何が必要かを話し合った結果、わが家の交通ルールとして「とみもまた」という用語が考え出される過程が上手に描かれています。五つの注意事項の必要性が説得的に示され、よく整理されている点も感心しました。

千葉県の中学二年生、小柏奈帆子さんの「安全へ繋ぐささやかな敬意」は、前に住んだ米沢市と今の柏市を比較し、信号のない横断歩道で車が停止する場面を、横断する歩行者の態度という視点から述べている点が特徴的でした。停車した車に手をあげ、感謝の気持ちを示すことが停車率を高めるという発想は素敵でした。

埼玉県の中学三年生、新井広子さんの「一人ひとりから始まるもの」は、自動二輪車で、心ない車からの事故にあった父から、自転車に乗る際のヘルメットの正しい着用の仕方と身体を守る服装の大事さを教えられてきた中で、交通事故データを分析しながら、そのことの重要性に気づいていく過程が上手に描かれていました。

山口県の中学三年生、中村輔さんの「決意の夏」は、祖父を交通事故で亡くし、これまた交通事故で亡くなった叔父の三十三回忌をこの夏に体験した筆者が、その口惜しさからドライバーの事故原因を追及し、それらは自転車の事故原因にも通じること、特に危険予知が大事なことを学んでいく過程が上手に描かれていました。夫と息子を事故で奪われた祖母が交通安全を願い立哨のボランティアを続けていることにも感銘を受けました。

最後に、数多くの応募作品の読み込みと絞り込みにご尽力いただいた予備審査員および事務局の方々、さらにまた本審査会において真剣かつ厳正な審査に当たっていただいた審査員の方々に心からのお礼を申し上げます。審査の報告とさせていただきます。

令和6年度交通安全ファミリー作文コンクール審査員 ー 中学生の部 ー

(敬称略、順不同)

鈴木 春 男	千葉大学名誉教授
溝 端 光 雄	交通評論家
吉 岡 耀 子	交通ジャーナリスト
青 海 正	全日本中学校長会会長
友 竹 明 彦	公益財団法人三井住友海上福祉財団専務理事
中 園 和 貴	文部科学省総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課長
今 井 宗 雄	警察庁交通局交通企画課長

※本作品集に掲載する作文は、作者の体験に基づく作品のオリジナリティを尊重する見地から、明確な誤字等以外は原文のまま掲載しています。

本作品集の転載については、次の条件をいずれも満たす場合に限り認めることとします。

- ①交通安全知識の普及、交通安全思想の高揚のために使用すること。
- ②営利を目的としないこと。
- ③転載誌(紙)等を警察庁交通局交通企画課担当あてに送付すること。

令和6年度交通安全ファミリー作文コンクール 優秀作品集

令和7年2月

発行 警察庁

〒100-8974 東京都千代田区霞が関 2-1-2

